

上手に伝えられなくて

作 藤田 久雄

登場人物

広居こずえ・・・九州から上京して大学卒業後、一つ年上の彼が起業した福祉施設で働く。現在は発達障がい者の従業員と小さな喫茶店を営むが、経営難のため借金がある。

生田つよし・・・発達障がい者でこずえの経営する喫茶店に住み込みで働いている。元はこずえの働いていた福祉施設の利用者だったが、母親の再婚をきっかけに不遇が重なり一人社会に投げ出され一度はホームレスにもなっていた。

山本しんや・・・子供の頃からおじいちゃん子だったが、その大好きなおじいちゃんが認知症でボケてしまう。その認知症のおじいちゃんを巡って家族が揉めてしまう。その事をきっかけに福祉施設を起業する。

広居ようこ・・・こずえの母。九州で工務店を営んでいた夫が他界。店もたたんで借金が残ってしまふ。借金返済のためスナックを始める。こずえには社長の彼との結婚を望んでいる。

村岡りゆうじ・・・強面の風貌だが常識人。弁護士に雇われ取り立てなどを代行する民間企業の社長。

安田やすお・・・村岡の会社で働いている。村岡を兄貴とってしまっている。

上沼えみ・・・こずえと大学時代の同級生。アナウンサーを目指していたが、夢破れ今は得意のしゃべりを活かして結婚式などの司会業をやっている。

石原さとみ・・・生田と同じ施設の利用者。生田に想いを寄せている。施設では歌を歌って皆を盛り上げていた。今でも生田の働く喫茶店で歌の練習をするために向く。

五十嵐よしき・・・同じ施設の利用者で石原さとみに想いを寄せている。

服部くにこ・・・福祉施設の職員でこずえと一緒に働いていた。石原と五十嵐に付き添って喫茶店にも来る。

岩崎せいと・・・喫茶店の常連客。

警官・・・・・・・・こずえの喫茶店の近所にある交番のおまわりさん。

男・・・・・・・・少し酔っぱらっている通行人。

女・・・・・・・・少し酔っぱらっている通行人。

その他・・・・・・・・通行人。

プロローグ

陽は沈み寒さはより深まってくる。
遠くから賑やかな音楽が聞こえてくる。
クリスマスが近いのだろう。

溶明。

都会の片隅の路地裏、ゴミが散らかっており人通りは少ない。時折そこを通る人は肩をすくめながら足早に通り過ぎていく。

ホームレスが一人、缶かん袋をぶら下げてのろのろと歩いてはゴミを漁り、またのろのろと歩いてはゴミを漁る。そこへご機嫌なカップルが通りかかる。

女 ちよつと酔っ払っちゃったかな。

男 おい、だいじょうぶかあ？

女 うん、だいじょうぶだあ。(よろける) おっとっと。

男 (女を支える) ほらっ、だいじょうぶだあ、じゃねーよ仕方ねえなあ。

女 えへへ。

ホームレスが漁っているゴミの一部が、男の方へ飛んできくる。

男 うわっ、汚ったねえっ。

女 あはは、くっさあーい。

男 (舌打ちをしてホームレスに) おいっ。

ホームレスはゴミを漁っていて気づかない

男 おいつ、お前えだよ、ルンペンっ。

ホームレス

女 ちよつと、もういいじゃん、ほつときなよ。(男の腕を引く)

男 (女の制止を無視して) おいルンペン聞いてんのかっ？ 大体テメーらルンペンは甘えてんだよっ！ この人間様の社会に順応できねえくせに、それでもこの社会にしがみつきやがって、その根性自体がルンペンなんだよっ。お前ら生きる意味あんのか、生きる資格があんのかっ・・・、あああ？

ホームレスは立ち上がりその場を去ろうとする。
男はホームレスを蹴飛ばす。
ホームレスはゴミに埋もれる。

男 このっ社会のゴミがっ、口もろくに聞けねえのかっ。
女 ちよっと、もういいでしょ、行こ。
男 あーあ、すっかり酔いが覚めちまった。
女 じゃあまた呑み直しましょう、わたしん家で。
男 お、いいねえ。
女 でもまずシャワー浴びてね、ゴミの臭いがするから。
男 うそっ、マジで？

女は笑いながら行く、男も後を追っていく。
ホームレスはゴミに埋もれたまま動かない。
そこへ広居こずえが通りかかるがホームレスには気づいていない。

こずえ ……。
ホームレス う、んーん。(呻き声)
こずえ えっ、びっくりした、ゴミだと思ったら、人がいたのね……。
ホームレス こんな寒いところで軒かいて寝てる。(行こうとする)
ぐう、ぐるしいい。
こずえ (振り返る) え？
ホームレス ぐるしい、むねが、胸が、痛い、苦しい……。
こずえ あのう、大丈夫ですかあ。
ホームレス ぐるしい……。
こずえ あのお……。 (恐る恐る近寄り) え、うそっ、いつ君！？
ホームレス むねがああ……。
こずえ え、何でこんな処で。

ホームレスは呼吸が荒くなっていく。

こずえ ちよっ、ちよっと待って、ちよっと待っててねいつ君、すぐ助けを呼ぶから。(通行人に助けを求める) あ、あのすみません。
通行人 はい？
こずえ た、助けてくださいっ。
通行人 どうしました？

通行人 (ホームレスを指差して) 苦しんでるんですっ。
通行人 (ホームレスに一瞥くれて) あ、自分はちよっ……。
通行人

通行人は去っていく。
こずえは、何人かに声をかけるが誰もがホームレスと認識したとたんに去って行く。
こずえは、ポケットのスマホに気が付き電話をかける。そして、ゆつくりと暗転する中、賑やかな音楽は高まり、その中に微かに救急車の音が混じりながら・・・溶暗。

1場

春先ごろ、開店前の喫茶店。
店内は現代的な内装ではなく、どちらかと言えば古くて、良く言えばレトロ口風。とは言えアンティークな物などは無く、殺風景な店内。

舞台セットは：客席に対して全体が斜になっている。上手側にはカウンターテーブルがあり、その奥には事務所への入口があり、手前にはトイレへの入口がある。下手奥には外への出入口がある。手前には桜の木があり一部の枝が壁を突き破り店内へ入ってきている。

（木のすぐ横、舞台正面側には窓がある想定）
その他店には小さなテーブルが3卓（又は2卓）ほどあり、それぞれに椅子が2脚ずつ向い合せてセットしてある。・・・トイレ近くの片隅には観葉植物が置いてある。

奥から何やら生田の歌う声が聞こえてくる。

事務所から生田つよし（発達障がい者）が現れ、手には布巾を持っている。
桜の木に近づいて。

生田
はい、おはようございます。もうすぐお昼ですけどお客さんには元気よく、いらっしやいませっ！と言いましょ、はい。

生田は開店準備を始める。
テーブルの前に立ち。

生田 よろしく願います。(テーブルを拭き) はいキレイになりました。

生田はすべてのテーブルに挨拶をし終わると、ウエストポーチに着けている腕時計を見てそわそわしだす。
そして、飛び跳ねる。
一息ついたら布巾を片づけようとカウンターの方向へ向かう。

ドア鈴が鳴り、こずえが入ってくる。
生田はすかさず飛び出して。

生田 いらっしやいませっ！

こずえ いっ君おはよう。ちゃんと眠れた？(以下、いっ君)

いっ君 おはようございます、寝ました。こずえさんこずえさん、何時何分、何曜日？

こずえ ごめんねいっ君、少し遅くなっちゃった。今日は、金曜日です。

いっ君 今日は金曜日です。

こずえ そう、金曜日。金曜日は何の日？

いっ君 金曜日は何の日ですかこずえさん。・・・はい。

こずえ はい、いっ君。

いっ君 今日は金曜日です。金曜日は何の日ですか？ 金曜日は金曜日の日です。金曜日の次は土曜日です。土曜日の次は日曜日です。その次は月曜日でその次は火曜日でその次は水曜日でその次は木曜日でその次は・・・

こずえ 金曜日はゴミ出しの日でしょう。

いっ君 はい、金曜日はゴミ出しの日でしょう。

こずえ ちゃんと今朝ゴミ出してくれた？

いっ君 はい、忘れないように昨日、こずえさんがゴミ出しの用意をしてくれましたので、おかげさまで。

こずえ ありがとう、いっ君。集積所は目と鼻の先だから流石に出来るわよね。(事務所へ)

いっ君 (がっかりして)・・・さすがに出来ます、もういい大人です。そのくらいの事は子供にだって出来ますから。こずえさんの心配性には困った困った。

外からゴミ収集車の音楽が聞こえてくる。
おじさん達が何やらブツブツ言っている。

こずえ (オフで)こくろうさまです。あつ、すみません、それうちので

す。はい、すみません。

ゴミ収集車の音楽が遠ざかっていく。

（ため息） やれやれ。

こずえ戻ってきて。

こずえ もう、いやねえ、これで何回目よお。何でうちのだけピンポイントに狙うのかしら。

こずえ ねらうのかしら。
カラスも朝から図太い神経してるわね。いつ君が朝ごみ出しした時もそこら辺にカラスいた？

こずえ わかりません、朝は外に出ていませんので。
え、だってゴミ出ししたでしょう？

こずえ しました。

こずえ その時よ。
カラスは黒いので、夜はどこにカラスがいるかわかりません。

こずえ 夜の話しじゃなくて、今朝よ。ゴミ出ししたでしょ朝？
朝はゴミ出していませんので、僕にはカラスの事はわかりませんので、カラスの事はカラスに聞いてください、おわり。

こずえ ・・・ちよっといつ君。
（そっぽを向いたまま） はい何ですか、こずえさん。

こずえ ゴミはいつ出したの？ ・・・人と話す時はこっちを向く。（生田を対面させる）

こずえ （目線は宙を向いたまま） こずえさんが昨日の帰りに、ゴミ出してくださいと言っていたので忘れないうちに出しました。

こずえ だからいつ？ （両手で生田の顔をはさみ） こっちを向く。
こずえさんが帰ったあと。

こずえ ということは昨日の夜にゴミ出したのね。

こずえ この前は忘れてしまったので、朝こずえさんがガッカリしていたので、こずえさんのガッカリした顔を見るのは、僕は好きではないので、ゴミを出しました。

こずえ ゴミを出したのはいいんだけど、夜じゃなくて朝出してって言ったよね。

こずえ はい、言いました。

こずえ （ため息） 夜ゴミを出したらダメなの。野良猫とかカラスがゴミ袋を漁り散らかして、いろんな人に迷惑がかかるでしょう。
迷惑千万。

こずえ そう、迷惑千万。だから夜にゴミを出してはダメ、わかった？

いつ君
こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ

ゴミを出してはダメ。
・・・ゴミは、出してもいいのよ。
ゴミは出してもいい。
夜は、
ゴミは出してもいい。
ダメ。
ダメ。
朝、ゴミを出し
出してはダメ。
いい。
いい、ゴミは出してもいい。ゴミは出したらダメ。(繰り返し)
・・・もう、朝から疲れるわねえ。ちょっといい君、裏に居るか
ら、何かあったら呼んでね。(事務所へ)
いい、ダメ、いい、ダメ、いい、ダメ、いい、ダメ、(植物の所へ
行き) やれやれ、はっきりとしないんだからこずえさんは、女心
と何とやらですか。

カウンターにある電話が鳴る。

生田は電話には出ず、おろおろとして耳を塞ぐ。

こずえ
いつ君

(オフで) ああー、はいはい、ちょっと待ってねー。
はいはい、ちょっとだけ待ちます。

こずえ入ってくる。

こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ
いつ君
こずえ

朝から誰だろう?
生田つよしですっ。
はい、もしもし、「喫茶、あなたの止まり木」です。
・・・
もしもし・・・、あれ、切れちゃった。
どちら様ですか?
間違い電話みたい、朝から嫌ね。(事務所の方へ) あ、いつ君、今
日の音楽かけといて。
はい。・・・今日は金曜日です。金曜日は何の曲ですか? 金曜日
は、金曜日の曲です。金曜日の曲は「ピアノクラシック、デイス
ク6、ノスタルジックピアノ、70分23秒です。」はい。

生田はCDをセットする。
曲が流れる。

いつ君 モーツァルト、メヌエット、へ長調。

ひと間あって。

ドア鈴が鳴り、安田やすお、が入ってくる。

安田は、スカジャンを着ていて、鋭い目つきで辺りを見回している。

生田は、安田に駆け寄り、元気よく……。

いつ君 いらっしやいませえっ！

安田はその声に一瞬ビクっとするが、生田にガンを飛ばして舌打ちをする。

生田は満面の笑みを湛えている。

いつ君 どうぞ、好きな席にお座りくださいませえ。

生田はカウンターへ。

安田は座ったあとも辺りを見回している。

生田が水の入ったコップを盆にのせて運んでくる、途中くしゃみをして手で鼻水を拭う。

いつ君 はいどうぞ。(水を出し)ご注文はお決まりですか？

安田 おお、おお、おお、ちょっと待てや。

いつ君 ちょっと待ちます。

安田 ……お前ふざけてんのか、汚ねえだろうが。こんな水飲めるか、手洗って入れなおしてこい。

生田はくしゃみが出そうになるが、ギリギリのところまで止まる。

いつ君 ……。

安田 お前聞いてんのか？

いつ君 ハックション！

安田 うわ、汚、汚ねっ。

生田はいつの間にか、水を下げてカウンターの方へ。

安田

お前ケンカ売ってんか！ (目の前には誰もいない) あれ、(舌打ちをして) おい、お前ちょっとこっち来いや！ ……こっち来いって言うってんだろが、ああ。

こずえ
いっ君
安田

(オフで) いっ君、どうかした？
問題なし。
問題あんだよ！

こずえ、出て来て。

こずえ
いっ君
こずえ
安田
いっ君
こずえ
いっ君
こずえ

いっ君、何かあったの？
足を洗って出直してきます。
え、足を洗う？
おい、シカトしてんじゃねえよ！
あら、お客さん来てたのね、いらっしやいませ。
ハックション！
いっ君、大丈夫？
大丈夫。

花粉でも入って来ちゃったのかしらね。あ、お水持っていくところだったの、いいわ私を持っていくから。(生田から盆を受け取り)・・・はいどうぞ。(水を出す)「注文はお決まりですか？」

安田
こずえ
安田
こずえ
安田
こずえ
いっ君
安田
こずえ
安田

はい？
汚ねえだろう、水。
え？
だから、くしゃみしてっから唾が入ってんだろうが、これっ。
ああ、失礼しました。すぐに別のをお持ちします。(独りで)足を洗って出直してこい・・・。
いらねえよ。それより、ここの責任者、呼んで来いよ。
はい？
だからっ、責任者呼べっつってんだよ！

ドア鈴が鳴り、客が入ってくる。

いっ君
こずえ

いらっしやいませっ。
あ、岩崎さん、いらっしやい。

岩崎は、ただならぬ空気を感じて一瞬立ち止まる。

岩崎
安田
こずえ
岩崎
こずえ

ど、どうか、しました？
あーん、 teme には関係ねえんだよ。
あはは、大丈夫ですから、どうぞ。
はあ。(空いているテーブルに行く)
あ、いっ君これ。(お盆を差し出す)

生田はお盆を受け取り、岩崎にその水を出す。

いっ君

ご注文はお決まりですか？

安田

ほらっ、さっさと呼べよ、責任者。

こずえ

あの、責任者は私ですが。

安田

ああ、あんた責任者？

こずえ

はい、そうです。

安田

ここの経営者、あっそう。(じろじろと辺りを見回り) あっはっはっ・・・。なんだこの店、ボロっ。(岩崎に) あんたも物好きだねえ、喫茶店なんてこちら辺にはゴロゴロあるだろうに、わざわざ一番さえない店選んで来るんだからね。

岩崎

あ、あ、アンティークな感じが落ち着くんで、それに――

安田

ああん？

岩崎

・・・。

安田

それに店も店なら、従業員も従業員で、もっと真面なのいなかったの？

こずえ

彼には彼の――

安田

あいつあれでしょ、(指で自分の頭を指して)マジでここんとこヤバイやつっでしょ？ 分かんだよね、あの手の奴。

こずえ

いっ君は確かに個性的な――

安田

いっ君？ なんだそれ、ガキじゃあるまいし、いい歳して気色悪いいなあ。

岩崎はコップの水を飲み干し立ち上がる。

生田は、すかさず安田の前に立つ。

安田

な、何だよお前、やんのか。

いっ君

(くしゃみが出そうになる)

安田

(のけ反る)

いっ君

(くしゃみは出ない) 僕はこう見えてもいい歳してます。

安田

はあ？

(視線は宙を仰ぎ) 僕は、生田といます。生きる、田んぼで、生田です。名前は、つよしですが、あまり強くありません。どちらかと言うと弱い方です、はい。(ウエストポーチを掴んで) なのでここには、いつもお薬を入れておきます。

安田

ああ、何言ってるんだバーカ！ (顔を近づけてガンを飛ばす)

いっ君

ハックション！

安田

うわっ、汚ったねっ、何しやがんだテメー、ぶっ殺すぞ！ わっ臭っ。

生田は、安田の発した見えない言葉を追いかける。

安田 おい待てコラっ、逃げてんじゃねえーよ！

安田の携帯が鳴る。

安田 あーん？ 何だっうっせーなあつ。(電話に出る) ああ、もしもし、あ、あ、兄貴、おつかれっすう、はい。あ、今その店っすう、はい。はい分かりました、はい、はい、はい。あ、はい。あ、失礼しまーす、失礼しまーす。

安田、内ポケットから茶封筒を出して、こずえに差し出す。

安田 これ。

こずえ え？

安田 んっ。(封筒を突出し)

こずえ あ、はあ。(封筒を受け取り) 何ですかこれ？

安田 見れば分かるから。

こずえ ・・・はい。

安田 じゃあ、確かに渡したからね。また来っから次は兄貴と一緒に。言っとくけど兄貴マジでハンパねえから、この俺が言うんだから間違いねえよ。じゃそう言う事で、(行きかけて) ああ、それと：・あいつクビにした方がいいんじゃないかねえの？

一同は、飛び跳ねている生田を見る。

安田

あんたも物好きだよね。あれでしょ、あいつ本気はやつでしょ？ つうかあんなの雇うくらいなら、まだ居ねえ方がマシだし。(岩崎に) ねえ、お宅もそう思うでしょ？。まあ真面な従業員雇うのも無理か、むしろポンコツのこの店には、ポンコツの人間がお似合いかあ、はっはっはっあーあ・・・。じゃあそれ、よろしく頼みますよお。(店を出る)

一同ほっと安堵する。

生田は自分にバイバイする。

こずえ封筒が気になり中身を確認し、すぐにポケットにしまっ。

こずえ

(ため息をつく)

岩崎

あのう、大丈夫ですか。

こずえ

え、ああ、大丈夫です。こちらこそごめんなさい、何だか変なことに巻き込んでしまつて。

岩崎

・・・あ、あの(鞆から花を出し)これ、どうぞ。

こずえ

ありがとうございます、わー綺麗、いつもすみません。

岩崎

いえ、このお店には花が映えますし、それに・・・えーっと、あはは。

こずえ

そうなんですよ、このお店ほんと何もなくて殺風景だから、おまけに(せり出す枝を一度見上げ)これですから・・・。

岩崎

はい。あ、いえあの、そう言うつもりではなくて、あの以前に広居さんが、この店に花でも飾っておけば雰囲気も明るくなるだろうからつて言つてたから。

こずえ

岩崎さんは本当に優しい方ですね。私が何気なく言った事も覚えてくださつて。

岩崎

ああいえ、まあ。こちらこそ広居さんが喜んでもらったのなら本望です。

こずえ

ええもちろんです、それにいつ君も植物が大好きですし。(生田を見て)

岩崎

・・・。

こずえ

どうかしましたか？

岩崎

いえ別に。

こずえ

(空いたコップを見て)あ、ごめんなさい、いつものコーヒーでよかつたですか？

岩崎

はい。

こずえ

はい、すぐに淹れて来ますので。(空いたコップを持って)いつ君、いつまでやってんの、ちょっといつ君。

いつ君

(自分にバイバイしながら)なんですか、呼びましたか？ こずえさん。

こずえは一度、花をテーブルに置き、生田のバイバイする手にコップを掴ませて。

こずえ

はいお仕事、お仕事、ポン。(と、お尻を押す)

いつ君

こずえさんは相変わらず人使いが荒いんですから。

こずえ

何言ってるの、ちょっとコップを片づけるだけでしよう。

いつ君

「喫茶あなたの止まり木」は、ブラック企業です。

こずえ

はいはい、もうどこでそう言うこと覚えるのかしら、(岩崎に)すみません騒がしくして。

岩崎

いえ。

生田とこずえがカウンターで仕事をしているところを、
岩崎は遠くから見つめている。

いっ君
こずえ
はい、キレイになりました。
はい、よくできました。(花を瓶に入れて) ほらいっ君、これ岩崎
さんに頂いたのよ。
いっ君
こずえ
僕は、花は、いただきませんので。
いっ君
こずえ
誰も食べないわよ。ほら、あそこのテーブルに飾ってきて。
飾ってきます。
こずえ
ちゃんとお礼も言うのよ。

生田は花瓶を持ってテーブルに行く。
花瓶を置き、そのまま戻ってくる生田に。

こずえ
いっ君
いっ君お礼は？
いっ君
こずえ
(岩崎の所に行き) 足を洗って出直してこい。
いっ君
こずえ
こらっ、いっ君ちがうでしょ。ありがとうございますでしよう。
いっ君
こずえ
ありがとうございます。
いっ君
こずえ
え、ああ、どうぞ。
いっ君
こずえ
あの、岩崎さんは、いい人ですか？
いっ君
こずえ
えっ、ああ、まあいい人、かな。
いっ君
こずえ
まあいい人ですか、本当にいい人ですか？
いっ君
こずえ
うん、いい人ですよ。
いっ君
こずえ
よかった、最近は何物騒な世の中ですからね。
いっ君
こずえ
ああ、そうだね。
いっ君
こずえ
人は見かけによりませんから。こう見えても僕は、一人では生きて
いけませんし、こずえさんには感謝してますので。
いっ君
こずえ
はあ。

岩崎
いっ君
こずえ
え、いや、あの、狙ってるんでしょ？
岩崎
いっ君
(話は聞かずに立ち上がり) こずえさん、こずえさん気をつけて
いっ君
こずえ
ください。狙われてますから気をつけてください。
いっ君
こずえ
(コーヒーを持っていきながら) いっ君、騒がしくしないの。お
客さんがいるまえでしょう、迷惑になるでしょう。
いっ君
こずえ
大体自分で自分の事をいい人って言う人に限って怪しいもんです
から、おそらくは変人ですから、だって僕の唾の入った水も平気

岩崎
えっ！
で飲み干しますし。

こずえ
そう言えば、いつ君は薬は飲んだの？

いつ君
飲んでません。

こずえ
ほら、それじゃあ飲まなきゃ、お薬。

いつ君
お薬飲まなきゃ（座り込み。ホーチから薬を出す）お薬飲まなきゃ、お薬飲まなきゃ、お薬を飲みます、お薬を飲みます。

こずえ
いつ君、そんな所に出さないで、ほらお客さんが居るんだし。

いつ君
たった一人ですけど。

こずえ
一人でもお客さんはお客さんでしょ、ほら裏に行って飲んできて、聞いているのいつ君。

岩崎
自分なら別に構いませんけど。

こずえ
いいえ、癖になるといけないので、こういうのはちゃんとしておかないと。（コーヒーは一旦テーブルに置いて薬を生田に持たせる）ほら一人で飲めるでしょう。

いつ君
こう見えてもいい大人ですから、薬くらい一人で飲めます。（事務所へ）

こずえ
やれやれ、本当にすみません騒がしくて、（コーヒーを出し）どうぞ。

岩崎
いえ、自分は大丈夫です。

こずえ
皆が岩崎さんみたいに理解があればいいんですけどね。

岩崎
大変ですね、いろいろ。

こずえ
まあ、今に始まった事じゃないですし、それにもともと福祉の仕事をしていた時から彼の事を知っているのです、もう慣れっこですから私は。

岩崎
そうですか、（コーヒーを一口飲み）あの、手伝いましょうか？

こずえ
え？

岩崎
いや、あの、自分、この店手伝いますよ。

こずえ
え、手伝うって、でもお仕事とか……。

岩崎
ああ、仕事ね、仕事の事なら大丈夫です気にしないでください。自分は、まあ、なんとするか、そのフレックス出勤なんですよ、ほとんどは在宅勤務なので時間にはゆとりがあるんですよ、ええ、え、でも。

こずえ
それにさっきも、あのガラの悪い人が言っていた事も一理あるのかなって。

こずえ
さっき言ってた事？

岩崎
ええ、従業員の事とか。

こずえ
（事務所の方をチラッと見て）ああ。

岩崎
いや、別に彼がどうかじゃなくて、普通のというか、あのちゃんとした人というか、とにかく自分なら広居さんの力になれると

こずえ

思うので、もしあれだったら……。

ありがとうございます。正直このお店をやっていくのに、私といっ君の二人だと色々と問題があるのはあるんです。でも見ての通りあまり景気も良くなくて、新たに人を雇うどころか、このお店をやっていくのも……。

岩崎

別に自分なら給料とかはいりませんし。

こずえ

いえ、そういう訳には。

岩崎

それに学生の頃、喫茶店でアルバイトしてた事もあるので、大体の事は出来ると思うし。

こずえ

何よりも、好きなんですっ！

岩崎

え。いやあのっ、ここ、此処がっ、この店が好きなんです。何にもない、ぼろーい、この殺風景な感じが……。

岩崎

いや、あの、違うんです。さっきも言いましたけど、あの、あ、アンティークな感じがとても自分には落ち着くんです、ええ、はい。ですから、まあ何と言うか、あの、急な提案なので今すぐに返事をどうのとかは難しいと思うので、良かったら少しだけでも考えてもらえたらなあ、ええ、はい。

こずえ

……はい、ありがとうございます。

岩崎

あ、いえ、そんな、ありがとうございますだなんて、ええ、まあ、はい。(コーヒーを飲み干し)ごちそうさまでした。(財布を出しながら)あの、今日はこれで失礼します。

こずえ

あ、はい。(テーブルにお金を置き)それじゃあまた。(逃げるように店を出て行く)

岩崎

あ、ちょっと、お釣り、岩崎さんっ。

こずえ

こずえ後を追い店を出て行く。

岩崎

誰もいない店内……照明が変化して生田が空き缶袋を手に見れる。

こずえ

そして、植物の近くに座り込み。

こずえ

あのさ、あのさ、せいちゃんはさあ、ずーっとお部屋の中にいて

こずえ

苦しくないの？ 僕はさあ、やっぱりさあ、お外に出てさ、お散歩したいしさ、それにお外にはさ沢山の緑があつてさ、ぎゅっと僕たちのことを抱きしめてくれるからさ、緑の見えるお散歩がさ、好きだな。……今度さあ、せいちゃんも一緒に行く？ ……う

こずえ

あのさ、あのさ、せいちゃんも一緒に行く？ ……う

こずえ

苦しくないの？ 僕はさあ、やっぱりさあ、お外に出てさ、お散歩したいしさ、それにお外にはさ沢山の緑があつてさ、ぎゅっと僕たちのことを抱きしめてくれるからさ、緑の見えるお散歩がさ、好きだな。……今度さあ、せいちゃんも一緒に行く？ ……う

こずえ

あのさ、あのさ、せいちゃんも一緒に行く？ ……う

んいいよ、じゃあ連れて行ってあげる。

生田は植物の中から黒い物を見つけて手に取り。

いつ君　これ何？・・・いいなあ、・・・ええ本当に、ありがとう。（それをポーチにしまっ）

こずえが戻ってくる。

こずえ　見失っちゃった。（手のお金をポケットにしまい）また今度でいいか。

こずえはテーブルのコーヒーカーップを片づけようとした時に、生田に気づく。

こずえ　あらいっ君、そんな所に座って何してるの？

いつ君　こずえさん、こずえさん（こずえの所へ行き）ちょっと座ってください。

こずえ　ええ何。

いつ君　いいから、ここに座ってください。

こずえ　（椅子に座る）はい。何、いつ君。

いつ君　とりあえずですね、これで我慢しといてください。

照れながら、ポーチからタコ糸を出して、こずえの頭の上へのせる。

こずえ　ええ、（それを手にして）何これ？

いつ君　何これって、決まってるじゃないですか。

こずえ　タコ糸？

いつ君　（呆れて）タコのはずがないでしょう、足が八本ついてますかあ。

こずえ　さんは僕と同じおバカになったんですか？　もう、誰がどう見たってこれはネックレスでしょう。

こずえ　え、ネックレス？

いつ君　こずえさんが昔お仕事に、大事な家族の大事なお父さんの形見のネックレスが干切れたでしょう。こずえさんのお仕事は大変な重労働ですので干切れましたでしょう。

こずえ　・・・別に、いつ君のせいで干切れた訳じゃないのに。

いつ君　こずえさんのガツカリした顔を見るのは御免ですので、とりあえず今のところはそれで堪忍してください、お願いします後生ですの。

こずえ
いつ君
こずえ
いつ君

あんな前のことを……。
それじゃ駄目ですか。
駄目だなんて、そんな事ないわよ。
じゃあ早く着けてください。

こずえはネックレスを何とか頭に通そうとするが、輪っ
かが小さくて通らない。

こずえ
いつ君

あれ、ちよつと無理かなこれ……。
はあく。やっぱりあれですか、やっぱりあの、女の人というのは
実際正直なところ、何だかんだ言っても高価な物の方がいいんで
すよね。

こずえ
いつ君

そんな事ないわよ。でもやっぱり、これはちよつと頭が通りそう
にないから……。
(肩を落とし) やっぱりブランド物じゃないと駄目って言う事
でしょう。

こずえ
いつ君

そんな事言っていないでしょう。
所詮世の中お金ですから。はあくあ、僕の頭の悪さに付け込んで
金品をせびる、これが世の常ですか。
なに言ってるの。

こずえ
いつ君

だって大体、女子アナは野球選手を狙ってますから、と言うより
ハイスペックなのがいいってお友達が言っておりましたが。
え、友達ってだれの。

こずえ
いつ君

(独り淡々と)そこに愛はありますか、諭吉はおりますけど本物
の諭吉はもうおりません、僕にはこずえさんがおりますので、野
口さんで十分です……。

喋り続ける生田を微笑みながら見ているこずえ。

そんな二人のほのぼのとした空気の中、

音楽が高まり溶暗。

2場

1週間後の午後。

カウンターで電話をしているこずえ、その向かいの席に
は、上沼えみが座っている。

舞台奥のテーブルには岩崎が気配を消して座っている。

手前のテーブルには安田が座っており、その向かいに、
厳つい顔をした男（村岡りゆうじ）が、サングラスをし
てカウンターに背を向ける形で座っている。

こずえ

朝の無言電話したのお母さん？ あ、そうなん、うん、なんでも
ない。もう、来るときは前もって電話してっ言ったやん、うん、
うん、うん分かったっちゃっ、はい、はいはい。（電話を切る）は
あ。

えみ お母さん、何て？

こずえ 後でここ来るって。

えみ え、来るって、こずえのお母さん九州に住んでるんでしょ？

こずえ うん、そうなんだけど、もうこっちに来てるって。本当うちのお
母さんは思い立ったらすぐ突っ走るんだから、こっちの都合も考
えずに。

えみ ここに来ると何か不都合でもあるの？

こずえ 別にないけど。

えみ でもそう言うところ、こずえ似てるよね。

こずえ え、そう言うところって？

えみ 向う見ずに自分一人で行動するところ。

こずえ 私そんな事しないわよ。

えみ よく言うわねあんた。突然仕事を辞めたと思ったら、この喫茶店
始めたじゃない、いきなり。

こずえ ここは・・・周りと比べて家賃とかがメチャクチャ安かったし、

えみ それにもともと私は喫茶店をやってみたいっち言いよったやん。

こずえ 言いよったやんって、方言で言われてもねえ。

えみ あ、ごめん方言出とった？

こずえ （桜の木を見て）そりゃあ、こんなに木の枝が壁を突きだしてい
る店舗なんて、誰も借らないでしょう。安くて当然よ。だからっ
ていくら安くても普通はどうにかするでしょう、あの枝。

えみ だって枝を切ったり、壁を修理したらお金がかかっちゃうでしょう。

こずえ それに、そもそもこの家主さんが、あの木は切らずにあのまま

えみ で、と言うのが条件で貸してくれたんだもん此処は。

こずえ 居るわよね、たまにそう言う変わり者が。

えみ でも家主さんの話を聞いてたら、ちゃんとした普通の人だったわ
よ。

こずえ （もう一度枝を見て）普通ねえ。

えみ （家主さんの口ぶり）「現代人は都合が悪い事はすぐに切り捨て
てしまおう、何でも自分の思い通りにしようとする。まるで
王様にでもなったつもりか。外から見れば貴族だが、内から見れ
ば物貰いだ。豊かになった現代社会に心を奪われた奴隷だよ。」と

こずえ

えみ

こずえ

か何とか言ってる……。
ああ、その手の人ね。寂しいのよ、時代が変わっていくのが。
……とにかく悪い事ばかりじゃないわよ。

えみ
こずえ
何が？

こずえ
えみ
ほらよく見て、もうすぐ咲くわよ、桜。お店の中にも、お花
見が出来るのよ、ステキでしょう。

安田
えみ
それはステキね。
ね兄貴、あれやばいっしょ。この店、余計なもんはあるのに肝心
なもんは何もねえし。つーか、やばいの店だけじゃないんすよつ、
ここで働いてる従業員もマジやばいっすから。なんつーかもうポ
ンコツもいとこポンコツで、まああれ見つけてくる方が至難の
業っすよ。だって真面に会話すら出来ねえんすから、(村岡の顔を
見て)えへへ。
……。

安田
村岡
あ？ あーあ、(立ち上がり)おいっコラっ、この店はお客様に水
も出さねえのかっ！ それとも水道代も払えなくて止まっちゃまっ
たのかっ、ああ！
あ、はいただいまっ。

こずえ
安田
村岡
安田
さっさと持って来いっ、干からびっだろっがっ！
おい。
はい、何すか兄貴。

村岡は安田の頭を叩く。

安田
痛てっ、すいません、すいません……、何すか？

村岡
お前、ペラペラとうるせえんだよ、女子か。

安田
あ、はい、すいません。

村岡
今日は、ここに何しに来たのか分かってんだろっが、ああ？

安田
はい、分かってます。

村岡
お前と仲良く茶しに来たんじゃねえんだよ。(貧乏揺すりをしてい
る)

安田
はい……。

村岡の貧乏揺すりが徐々に大きくなる。

えみ
こずえ
こずえ、あの人達よく来るの？

えみ
うん、来ない、(チラッとポケットの茶封筒を見て)けど……。

こずえ
えみ
けど、何よ？

こずえ
うん、まあ、ちよっと……。

えみ
ちよっとって何よ。

こずえ ……
村岡 おい、やす。
安田 はい、すいません兄貴。
村岡 まだ何も言っただろ。うが。
安田 あ、はい、すいません。
村岡 便所何処だ？
安田 え、多分あっちと思うんですけど、いや、あっちかな、ちょっと聞いてきます。
村岡 いいよ、自分で探すから。
安田 あ、はい、すいません。

村岡は立ち上がり辺りを見回す。
こずえは水を手にして。

こずえ あ、御手洗いでしたらそちらです。
村岡 ああ、(こずえに一瞬見とれるがすぐに顔を逸らし)お、おう。(トイレへ入る)
こずえ (水をテールに置き)ご注文はお決まりでしょうか？
安田 今日は、あのポンコツいねえの？
こずえ え？
安田 だから、ポンコツだよ。
こずえ ポンコツ、ですか？
安田 そうだよ、ポンコツだよポンコツ。
こずえ ……
安田 この前の従業員だよ、ポンコツって言ったら、あいつしかいねえーだろ(岩崎に)なああ？
岩崎 ああ、ははは。
こずえ 彼は今、裏で休憩中です。
安田 まだ居んだ？ 使えない従業員雇う余裕なんてないでしょうに、あんたもさあ、もつと金の使い方考えた方がいいんじゃないかねえーの。無駄な経費は削減しないと…ねえ。
こずえ ……
岩崎 あ、あの、お、おかわりいいですか？
こずえ あ、はい。
安田 ポンコツで思い出したんだけどさあ、此処のポンコツに負けねえくらいにポンコツを、こないだ見たんだよ。(岩崎とこずえの間に割って入り)俺がさ、夜中にコンビニ言ったんだよ、兄貴が挽きたてのコーヒーが飲みたいうて言うから。そしたらよう、このクソ寒い中、半袖半ズボンのおっさんがそのコーヒーマシンの前でじっとつつ立ってんだよ、別にコーヒー買う訳でもねえーのに。

こずえ

でさあ俺がコーヒー淹れてる間、近くでじっとこっち見てんだよ
気色悪い。まだそれだけならいいんだけどよ、何か臭せえんだ
そいつ。それによく見りゃあ小汚いしよ、どう思う？
・・・。(顔を逸らす)

安田は岩崎の方に視線をやる。

こずえは静かにその場を去る。

岩崎
安田

え、まあ、そう言う、あれなんじゃないですか・・・。
ホームレスだよそいつ、間違いなく、寒さ凌いでんだよコンビニ
で。んでおまけによ、そいつ何食わぬ顔して目の前にある、あの
コーヒー用のポーション飲んでやんの。それも一つどころか店員
が気付くまで何個も何個も・・・。それで命繋いでんだぜあれ。
ポーション飲んで体力回復か？ ドラクエじゃあるまいし。
それなら、ファイナルファンタジー、とかの方が・・・。

ああ、何が？

いや、別に・・・。

つかさあ、あれってさあ、万引きになんの？

・・・。

でもさ、あれってタダでしょ、って言う事は万引きにはなんねえ
ーのか。あいつらポンコツも考えてやってんのかな、そこらへん
は、はっはっは。ポンコツにはポンコツなりの生き方があるって
か、はっはっはっは。

トイレから水の流す音がする。

何だか変な音。

村岡が出てくる。

安田

ああ兄貴、長かったっすね、うんこっすか？

皆の視線が村岡へ。

その視線を受けて。

村岡

違うわボケっ、お前ぶっ殺すぞ！

安田

す、すいません兄貴。(小声で) そんなムキになる事ないのに。

村岡

ああ？

安田

すいません。

こずえ

おトイレ、壊れてました？ 最近また調子がよくなって。

村岡

(一度こずえを見るが顔を逸らし) ああ、いや別に問題ありませ
ん。ただ、花、あったでしょうトイレ。ちよっとそれ見てただけ

こずえ

ですよ。だからその……（目の前にある植物を弄りながら）キ、キレイだなんてね……。

好きなんですか？

村岡

（一瞬ビクツとする）

こずえ

私も好きなんです。

村岡

（ゆっくりと振り向く）

こずえ

植物。花とか緑があると落ち着きませんか？

村岡

（背を向けて）お、おお、まあなあ、落ち着く、落ち着く、（葉っぱの臭いを嗅いだりして）ああ落ち着くうう。

えみ

何か危なくない、あの人……。

こずえ

それ、あちらのお客様から頂いたんですよ。

えみ

ちよつと、こずえ。

こずえ

ん？

村岡の視線は岩崎へ、そしてゆっくりと歩み寄る。

えみ

あの人達なんなの？

こずえ

何なのって、そりやお客さん……。

えみ

だってなんかガラ悪いし、あっちのうるさい方は感じも悪いし、あんなのが出入りしたら、他のお客様も寄りつかないわよ。ただでさえこの店は閑古鳥が鳴いてるんだから、店の名前変えたら。

村岡は岩崎の向いの席に座ってじっと岩崎を見ている。

岩崎は小さくなって下を向いている。

えみ

何であの人達わざわざこの店を選んだのかしら、喫茶店なんて他にいくらでもあるのに、ねえ。

こずえ

う、うん。

えみ

それともこずえ、何か目をつけられるような事でもしたの？

こずえ

え、（何かをこぼす）あ、あーあ。

えみ

何動揺してんのよ、え、まさか凶星？

こずえ

あーあ、いやだ汚しちゃった。

こずえは前掛けを取りカウンターに置く。

その拍子に茶封筒が落ちる。

えみ

ああ、何してんの、もうほらっ。（カウンター周りを拭く）

こずえ

あ、ごめん、ありがとっ。

えみ

（茶封筒を手に）あ、これ汚れちゃうわよ。

こずえ
（必死になって封筒を取り上げ）ありがとっ、ありがとっ、あり
がとうね、うんもう大丈夫だから、うんえみ、ありがとっ。
何よ、何そんなに慌ててるのよ……。
いや、別に。
ねえ、その封筒なに？
え、これ、別に。
別について、おかしいでしょう。
えみには関係ない事だし、私の事だから……。
私の事。
うんそう、お店やっていると色々あるのよ。
ふーん、色々……。

生田が入ってくる。

いっ君
こずえ
ただいま休憩終わりました。
ああ、いっ君丁度よかった、これ岩崎さんの所へ持って行って
くれる。
はい。（鼻がムズムズしている）
……あ、いっ君やっぱいいわ、私が持って行くから。
はい。

こずえは落ち着かない様子でカウンターを離れる。

いっ君
えみ
やれやれ。
いっ君
こんにちは。
いっ君
いらっしやいませっ！

えみは愛想笑いを浮かべる。
生田の声がきっかけで村岡らは、こずえが向かって来る
ことに気が付き、もと居た席に戻る。
生田はプルトップの入った瓶を出し、中身をカウンター
に広げて数えている。

えみ
いっ君
……。
いっ君、何してるの？
……。
プルトップそれ？
……。
コレクションしてるの？
……。
今度私も持って来てあげるね。

いつ君

えみ

いつ君

えみ

いつ君

・・・。
いつ君、私、誰だか覚えてる？
・・・。

聞いてるのかな？
こずえさんのお友達で、大学生の時の同級生で、アナウンサーを目指していましたが、どこの局にも取ってもらえなかったの、今は得意のしゃべりを活かして、イベントや結婚式などの司会業をやっております、上沼えみです、よろしくお願ひします。
しっかりと覚えてくれてるのね。

えみ

いつ君

えみ

いつ君

えみ

こずえ

安田

村岡

安田

村岡

（こずえに背を向けて）おい、やす。
はい、何すか？
ちよっとこっち来い。
（改めて）ご注文はお決まりですか？
兄貴、どうします？
（こずえに背を向けて）おい、やす。
はい、何すか？
ちよっとこっち来い。

村岡は安田に耳打ちする。

安田

村岡

安田

いや、従業員っていうか、この店の責任者らしいですよ。
（蹴飛ばす）バカ、声でけんだよお前っ。
はい、すいません、すいません。

また耳打ちする。

安田

村岡

安田

こずえ

安田

え、名前っすか？
（安田を睨む）
・・・（こずえに）名前、なんだっけ？
え、名前ですか？
そうだよっ、名前だよ。

村岡は安田を蹴飛ばす。

安田

痛っ、え、何すか兄貴。

村岡は安田の頭を脇で固めて。

村岡

お前、口の聴き方知らねえのか、もっと丁寧に喋ろや。

安田 はい、はいすいません。

二人は落ち着き、安田は村岡の視線を感じながら。

安田 お名前は、何だったでしようか？

こずえ うちの名前は「喫茶、あなたの止まり木」です。
だそうです兄貴。

村岡 (蹴飛ばす)

安田 痛っ(自棄になって)むしろもう気持ちいいっ。

村岡 お前バカかつ、店の名前聞いてどうすんだ、このポンコツがつ。

こずえ あのう。

村岡 (改まって) ああ、また後で呼びますので、どうぞ仕事に戻られ
てください。

こずえ あ、はい。

安田 直接、話せるんじゃないん。

村岡 ああ、テメエ誰に口訊いてだオラっ。

安田は村岡にボコボコにされる。

その様子を岩崎は見ている。

安田 (岩崎に) お前何見てんだよコラ、痛っ。見せもんじゃねえーん

岩崎 だよ、痛っ。

安田 いえ別に、見ていません・・・、うふっ。

岩崎 お前、今笑ったろ？

岩崎 いえ、笑っていません。

安田と岩崎は、笑ったろ、笑っていませんを繰り返す。

安田 (岩崎の所に行き) 笑って・・・。

岩崎 (顔を隠したまま) いいとも。

安田 はいっぶっ殺す。

岩崎 ちよっと、ちよっとタイム。

安田 タイムとかあるかつ、根暗っ。

岩崎 何だか騒がしいわね。

こずえ ごめん。

えみ ああ、いや別にいいけど。

こずえ あ、いっ君また数えてるのそれ、お仕事中は数えるの禁止って約

束したでしょうもう。聞いているのいっ君。

えみ いいじゃない、別にこれくらい。

こずえ ダメよ。えみは知らないから、これくらいって思つかもしれない

えみ
こずえ

けど、一度集中したらもう何も手につかないんだからいい君は。ほっといたら閉店になってもやってるんだから。そうなんだ。

えみ
こずえ

そうよ、それによく考えてよ、うち飲食店なのよ。プルトップとはいえ、ゴミ箱に捨てられていた缶の一部よ、衛生的にもよくないでしょう。

こずえ

まあ、そうね、神経質な人なら文句言うか。最近は何かとうるさいし、「東京は日本で一番世知辛いところである」ってね。

こずえ
えみ
こずえ

でしよう。ああいい君、空き缶も持って来て。駄目じゃない店の中に入れちゃあ、ほら片づけて来て。

こずえ
えみ
こずえ

生田つよし！
はい。(片づけて裏へ行く)

えみ
こずえ

プルトップなんて集めて何が楽しんだらうね。

こずえ
えみ
こずえ

さあね、でも一度やりはじめたら、とことんこだわるからね、いい君は。せめてゴミ以外の物にしてくれたらいいんだけど。ところで、こずえ。

こずえ
えみ

何？
さっきの封筒なんだけどさあ。

生田戻って来て。

こずえ

空き缶、外に出して来た？

こずえ
えみ
こずえ

まだあります。(もう一つの空き缶袋を取りに来る)

こずえ
えみ
こずえ

ああ、本当(袋を取って)はい。どうもです。

こずえ
えみ
こずえ

あれってさあ。貰いました。

こずえ
えみ
こずえ

え？

こずえ
えみ
こずえ

(安田たちを指して) あちらさんに貰いました。

こずえ
えみ
こずえ

封筒を？ そうなの？

こずえ
えみ
こずえ

僕が嘘をつくように見えますか？

こずえ
えみ
こずえ

・・・見えない。

こずえ
えみ
こずえ

ちよっといい君、早くゴミ捨てて来て、汚いからっ。

生田、裏へ行く。

こずえ
えみ
こずえ

え、何あの人から貰った・・・。

こずえ
えみ
こずえ

いや違うのよ、あの、貰ったは貰ったんだけど、貰うとかそう言

うのじゃなくて……。
ラブレター？

えみ
こずえ

はあ？

えみ

何だ、そうだったんだ、通りで変だと思った。これで合点がいくわ。

こずえ

何か勘違いしてるから、えみ。

えみ

いいって、いいって、なるほど。そうじゃないと、あんなのがこの様な店に来るわけないもんねえ、この店禁煙だし。

こずえ

今時、禁煙の店なんて沢山あるでしょう。

えみ

普通、あの手の人たちが入るような喫茶店って、やっぱり地下にあって、煙草臭くて、薄暗い雰囲気のところですよ。

こずえ

いや、だから。

えみ

こずえは学生の時からそこそこモテたしねえ、なんか守ってあげたくなるタイプだし、んでもってこんなでも意外としっかりしてて真面目。

こずえ

意外とつてなによ。

えみ

ただ少しドジ、男受けするんだろうねえ。その点私は何て言うか、あまり隙を見せないタイプだから近寄りがたいらしいのよねえ、そんな事ないのにねえ。

こずえ

知らない。

えみ

ねえ、どっち？

こずえ

やっぱりあっちか、厳つい方。何かこずえの事を意識してる感、満載だもんね。

こずえ

だから、そう言うのじゃないってこれは……。
でも私は正直どっちも無理。見た目はともかく、やっぱり堅実な人じゃないと。

こずえ

分かなでしようそんなの。雰囲気はちょっと近寄りがたいけど、意外と堅実な人かもしれないでしょう。

えみ

何でこずえはそう思うの？

こずえ

え、だってほら、さっき緑があると落ち着くって言ってたじゃない。植物が好きなのはピュアな人、多いでしょう。

えみ

そうとは限らないでしょ、それにあの人が落ち着くのは葉っぱよ。

こずえ

葉っぱ？

えみ

そう葉っぱ。……だから大麻よ、脱法ハーブの類よ、さっきもあの人怪しかったでしょう動きが……。大体あの人達、何の職業なのよ。

こずえ

それは、おそらく……。

えみ

薬の売人なんじゃないの。

こずえ

えみっ聞こえちやう、声大きいから。

えみ

あ、ごめん。とにかく勢いだったり、その場の流れで決めちゃうと、後で失敗することになるからよく見極めなさいよ、自分の目で。あれだったら私も相談に乗るから、伊達に結婚式の司会やってる訳じゃないわよ。何組もカップル見て来てるんだから、何となく分かるのよ、あ、この夫婦は何年くらい続くなつてのが……だから違うって、それに私は――

こずえ
えみ

あ、そうよね。しんや先輩がいるもんねえこずえは。その事はちやんと言ってるの。あ、でもあえて言わずに三角関係ってのも燃えるわよねえ。何の弊害もなくつつ付くより、恋のライバルがいて、お互いが愛情の深さを競い合った末に結ばれた方が、より深い家族になれるだろうし。一難あった方が、ちよつとした下らない理由で離婚なんて事にもなりにくいだろうから。

こずえ
えみ

(呆れて)……。最近は何かあれば、すぐ別れるでしょう。学生の恋愛じゃないんだからね。別れた当人たちはいいかもしれないけど、一番の被害者は周りよね、特に子供かしら親の都合で、ねえ？

こずえ
えみ
こずえ
えみ

聞いている？

はい聞いているわよ。

何か私なんかわさあ、仕事柄いろいろ考えちゃうのよね。結婚ってなんだろう、家族になるってなんだろうって……。いろいろ悩んでるのにさ、親はさあ、いつまでブラブラしてるんだとか、早く孫の顔が見てみたいとか勝手な事を言っってプレッシャーかけてくるのよ……。家族ってめんどくさい……。

村岡

おいっ、やす、ちよつと来い。(耳打ちして)

安田

え、それ仕事と何の関係があるんすか？

村岡

いいから、お前は黙って俺の言う事を聞いとけばいいんだよ。

安田

はい、すいません兄貴。

安田はカウンターの方へ行き。

えみ

(安田に背を向けたまま)でもやっぱり何だかだと言っても見た目は重要よね、こずえ。

こずえ
えみ

そうねって、言ってたじゃない。どちらかと言えば爽やかな感じの人がいいって。ほらあんた昔の、あのTOKIOの長瀬くん、それもデビューしたての頃のね。あの半ズボン姿がたまらないっ、セクシーって言ってたでしょう。

こずえ
えみ

そんな事言ったかな。言った言った。

安田 ジヤニーズの、長瀬、智也？
えみ そうそう。

安田 半ズボン？
えみ そうそう。

安田 爽やかでセクシー？

えみ あれで、♪君が好きだよ、って歌われたら誰でも好きになるわ
よねえ、こずえ。

こずえ うーん、まあ、なる、かなあ？

安田は村岡の所へ戻る。

えみ

まあでも、私もどちらかと言えばTOKIOよりかは嵐の方かな。
何て言うか嵐のメンバーは五人とも仲良しじゃない、それがすごく
好感もてるでしょう、何か楽しそうだし。でも正直、今は私ジ
ヤニーズじゃないのよ、KPOP(話は続いている)……。

安田は村岡に伝え、村岡立ち上がる。

村岡

よしわかった、やす帰るぞ。

安田 え、帰るんすか？

村岡は店を出て行く。

安田

え、兄貴いいんすか？ ……金どうするんすかあ兄貴、ちよつ
と待ってくださいっ。

安田、店を出る。

こずえ

ありがとうごさいました、何も頼まないで帰っちゃった、あっそ
れ。

えみ

(タコ糸で綾取りをしている) え、これ？

こずえ

そう。

えみ

(綾取りをしながら差し出して) はい。

こずえ

いや、そうじゃなくて。

えみ

何？

こずえ

それ、私の。

えみ

ああ、(タコ糸を渡す) はい、……何に使うの、そのタコ糸。

こずえ

ネックレスよ。

えみ

え、ネックレス？

こずえ

そう、ネックレス。

えみ
こずえ

それが？ いや、ただのタコ糸でしょう。
まあそうなんだけど、いつ君が私にプレゼントしてくれたのよ、
これ。

えみ
こずえ

へえーそうなんだ。何でタコ糸、いやネックレスを。
私かね、前の職場でしてたネックレスが千切れちゃったのよ。そ
れでそのネックレス代わりだって言って作ってくれたの、いつ君
が。

えみ
こずえ

ふーん、そうなんだ。
実はその千切れたネックレスは、私の父の形見だったのよ。それ
で大事にしてただけど、ほら利用者さんで時々パニックを起こ
して暴れる人もいるでしょ、その時にね。
大変ね。

えみ
こずえ

その時に丁度いい君も居てね、一緒に場を鎮めようとしてくれて
いたから、彼なりの責任を感じていたのかな。

えみ
こずえ

いいところあるのね、彼は。
ヒーローだったのよ、いい君は。

えみ
こずえ

そう、いい君は施設内で、いつも困っている人や弱い人の事を守
ってあげていたの。だから皆にはヒーローって言われていて、仲
間からとても慕われていたのよ。

えみ

そうなんだ、でも何でそのヒーローは施設を出てここで働いてる
の？ こずえは兎も角として。しかもヒーローはここで寝泊まり
してるんでしょう？

こずえ

え、うんまあ、それは色々あるから。

えみ
こずえ

え、もしかして二人は付き合ってるの？
何バカなこと言ってるのよ、そんなことある訳ないでしょう。

えみ
こずえ

そうよね、そんなことある訳ないわよね。流石に障害者の彼と恋
人になりたいとは誰も思わないわよね。
・
・
・

こずえ
えみ

あ、ごめん。

店のドアが開き、大きな荷物を持った女（広居ようこ）
がキョロキョロしながら入って来る。
どことなくお水（水商売）の匂いが漂っている。

ようこ

ここであつとるかな？

こずえ
ようこ

いらっしやいませって、お母さん。

こずえ

ああ、よかった、合つとつた合つとつた。ちよつとこずえ、これ
持って。
お母さん、駅に着いたら電話してくればいいのに、そしたら迎

えに行ったのに。

ようこ

駅に着いてもまたあの人がゴミの中やろう、もう。目の前にタクシ
ーが止まっとったけ、電話せんで乗った方が早いっち思ってたね。

こずえ

あの人がゴミっち、そんなでもないやろう。東京駅とか新宿駅に比
べたら。

ようこ

あたしにとっては何処も同じよ東京は、何であんなに人が多いん
かね。

こずえ

(荷物を置く)

ようこ

こつちじゃ年中わっしよいでもやりようみたいやねえ(座る)ふ
う。ちよつとこずえ、何か飲み物ちようだい。

こずえ

お水でいい？

ようこ

うん。

えみ

ねえ、こずえ。

こずえ

ん、何？

えみ

わっしよいって何？

こずえ

ああ、地元のお祭りよ。わっしよい百万夏まつりって言ってね、

えみ

でも最近全然行ってないな私は。

こずえ

ふーん、東京では年中お祭りかあ。

えみ

まあ、私も初めて東京に来た時は、確かに人の多さに驚いたわ。

こずえ

未だに慣れないもん。

えみ

何処から湧いてくるんだらうね、あの人だから。まあ東京にはど

こずえ

こかしら甘い蜜があるんだらうね。

岩崎

甘い蜜？ 蟻んこじゃあるまいし。(水を持って行く)

こずえ

あのう。

岩崎

はい？

こずえ

今日はこれで。

岩崎

あ、はい、いつもありがとうございます。

こずえ

(お金をテーブルに置いて)ご馳走さまでした。(足早に行く)

岩崎

またお待ちします。(テーブルのお金を手に取り、一度岩崎に視
線をやり、お金をポケットにしまう)

こずえ

線をやりに、お金をポケットにしまう)

岩崎、店を出る。

ようこ

あら、あたしが騒がしくしちゃったかしら。

こずえ

大丈夫よ、あのお客さんは良い人だから、(水を置き)はい。

ようこ

ありがとう。(水を飲む)それにしても斬新やねこの店、さすが東

京。店の中に桜の木があるとか、あたし初めて見たわ。(木の近く

に行き)もうすぐ咲きそうやね。

こずえ

そうなんよ、今週中には咲くんやないやつか。

ようこ

もう一週間くらいあとに来ればよかったかねえ……。家賃とか

こずえ
ようこ

高いんやないんね此処、こんなに洒落とんやけ。
そうでもないんよ、東京にしてわ。
まあ、そこらへんは社長さんがおるけ何とかなるやろうけど。

えみが振り返り、こずえを見る。
こずえは一度、えみを見て。

こずえ
ようこ

あ、違うのよ。もうお母さんっ、社長さんっち呼び方やめてっち
言ったやん。他の人が聞いたら変な誤解するやろう。
誤解っち何ね。あんたの彼、えーと何やったっけ、んー、あそう
そう山本君やったっけ、社長さんやろうもん。若いのに大したも
んやね、あんたも去年までは一緒に働きよったんやろう、それで
今度は喫茶店まで始めさせてもらってから。

こずえ
ようこ

ここは私が一人で始めたんやけ、しんや君は関係ないもん。
関係ない事があるかね、散々お世話になっとなってからに。お母さ
んも改めて挨拶しとかんといけんけね。電話では何回か話したけ
ど、あんたが大学生の時に一度チラツと見ただけやったけ、もう
顔も思い出さんし。で、いつ結婚するんね。あんたももういい歳
やろ。

こずえ
ようこ

今は、その話はいいやろう。
あんたの花嫁姿が一番楽しみにしとったのはお父さんなのに……、
なんでかねえ。

間。

ようこ
こずえ

(身震いして) ちょっとお手洗借りるわね。
うん、あっち。

ようこトイレに入る。
こずえ空いたコップを持ってカウンターへ。

えみ
こずえ
えみ
こずえ
えみ

どこも似たようなもんね。
え。
まあ、仕方ないか、私達っていい歳だもんね。
いい歳っていくつから？
それは……、理想の生活から現実味のある生活を考えるよう
になった時、かなあ。

生田がお腹を擦りながら出てくる。

いっ君
こずえ
いっ君
こずえ
えみ
こずえ
えみ
こずえ
あ、あの、ちょっとこんな所がゴロついてきましたので、はい。
え、トイレ。今は使用中なのよ、もう少し我慢出来る？
んーん、少しはどれだけですか？
えーっと、それは……。
いくら親子でも、人のトイレの時間までは分からないでしょう。
そうね。

生田はトイレの前で。

いっ君
こずえ
いっ君
こずえ
あ、ああ、ああ、あ。
少しはどれだけですか？ ウンコしてますか？ 便秘ですか？
いっ君、ちよっと。

トイレの流れる音がする。(相変わらず調子が悪い様子)
ようこが出て来る。
生田はようこを押し退けてトイレに入る。

ようこ
こずえ
何ねっ、もおあの人。
ごめん、お母さん。
ちよっと、トイレ大丈夫？ あれは直した方がいいんじゃないと、
こずえ。
うん。
さあ、そろそろ行こうかな。
行くつちどこに？
ホテルにチェックインしとかんとやる。それに夜は(チラシを出して)ここに純子ちゃんの歌を聴きに行くんよ。東京タワーをバックに一杯飲みながらね、洒落とるやる。
純子ちゃん？
あれ、言っとらんかったっけ？
何も聞いとらんよ、そんなん。
そうやったかね。ほら、お母さん俳句を習いよるつち言ったやる。
うん。
そのの先生とこの娘さんよ。普段は福岡で歌を歌いよるんやけど、
今回は東京のほら、それに載ってある。
六本木の。
そう、六本木のバーで歌うつち言うけね、行くんよこれから。たまにはいいやろう、せっかく東京に来たんやけ。普段は小倉の自分の店で、おじ様達の歌ばかり聴いとるけ、気分転換に。だけ
思い切って少しだけ、お店閉めたよ。
大丈夫なん、お店休んで。

ようこ
しょうがないやろ、従業員を雇う余裕なんかないんやけん。それ
とも、あんたが帰って来て一緒に店を手伝ってくれるんね。
・・・。

こずえ
ようこ
まあ、この時期はちょうどお客さんも少ない時やけ、息抜きする
のに丁度いいんよ。

こずえ
うん、そう。

ようこ
あそうや、これお土産、はい。

こずえ
なーん、これ？

ようこ
チョコレートよ、北九州世界遺産のネジチョコ。ほんとにくるく
る回せるんやけ、あれやったら皆で食べり（えみを見て）ねえ。

えみ
あ、どうも。

こずえ
ありがとう。

ようこ
（荷物を持って）よっこいしょ。

こずえ
ああ、私、途中まで送ろうか？

ようこ
いい、いい、もうタクシー拾って行くけ。それにあんたが付いて
来たら店どうするんね。

こずえ
え、（えみを見て）大丈夫よ、ちよつとの間、留守番たのむけ。
え、私。

トイレの音。

生田が鼻をつまんで出てくる。

こずえ
従業員もう一人おるけ。

ようこ
なんね、あの人は此処の従業員ね？

こずえ
そう、生田つよし君。

生田が近づいて来て、元気よく。

いっ君
いらっしやいませっ！

ようこは少し怯み、生田はようこを嗅ぐ。

いっ君
おえー、くさっー。（その場から遠ざかる）たまらんです。

ようこ
はあ？ なんっあの人、いきなり失礼やね。

こずえ
まあまあ、彼はちよつとね、个性的やけさ。

ようこ
そういう問題やないやろう、普通お客さんに対して臭いとか言う
かね。

こずえ
いや、そういう意味で言ったんやないと思うよ。

ようこ
そういう意味やないっち、どういう意味ね。

生田は再び、ようこに近づき。

いっ君
ようこ
こずえ
いっ君
ようこ
こずえ
ようこ
いっ君
ようこ
こずえ

おえー、(鼻をつまみ、ようこの周りをうろつろとする)
ちよっと、なんねこの人。
こらっいっ君、そんな事しちやダメでしょ。
たまりません。
こずえ、あんた一体どういうつもりで、この人雇っとんね。
いや、だけんそれは、(動き回る生田に) ちよっといっ君っ。
うっとうしいわね、ハエみたいにっ。
(楽しくなって) ブー、ハエはウンコの周りを飛びます。ウン
コは臭いのでハエは喜びます。
ちよっとちよっと、こずえっ、どうにかしなさいよこの人っ。
いっ君っ、ちよっともう、生田っよし！

生田、カウンターの方へ行く。

こずえ
ようこ
こずえ
ようこ
こずえ
ようこ
こずえ
ようこ
こずえ
ようこ
こずえ
ようこ
こずえ

(ため息)
あんた、あんな人はやく辞めさせなさいよ。
彼は嫌がらせとかそんなんで臭いっち言った訳やなくてさ、ほら
お母さんのその香水の匂いがね。
香水がなんよ。
ほら(ようこを嗅いで) ちよっと着けすぎたんやないと？
そんなことないわよ、いつも通りよ。大体あんたとあの人はどう
いう関係なんね、まさか、あんたと・・・。
どういう関係っち、ただの従業員っちやっ。
だけんっー
(ようこの言葉を遮り) いやだけん利用者さんなの、もとね。
利用者さん？・・・もうどういいう流れで一緒に働きよるかは知
らんけど、お母さんはあんな非常識なバカみたいな人と一緒にな
るのは反対やけんね。
バカとか言わんでっちや、それに一緒になるとかやないけ。

生田は静かに事務所に消える。

ようこ
こずえ
ようこ

あんた親がバカにされとるのに、他人を庇うんね。
だけ、そうやないっちや。
(桜の木に向かって) おとうさん、私達が手塩にかけて育てたこ
ずえは、すっかり東京に汚されてしまいました。こんな事なら、
高いお金を払って、仕送りをしてまで東京の大学とかに行かせん
やったらよかったです。そうしたら家族水入らずで幸せに暮らせ

たのに……。やっぱり家族は一緒が一番です。私はこれから一人でどうやって生きて行けばいいんですか、お父さん。(鼻をすすり)
ちよっとお母さん、ごめんね私が悪かったけ、ね。もう泣かんで……。
(鼻をすすする)

生田がえみに絆創膏を手渡して何かを伝え、そしてまた事務所へ消える。

えみ え、なに、絆創膏？

えみ、絆創膏をこずえに差し出す。

えみ はいこれ、いつ君が、それと「忘れない限りなくありません」って、お母さんに……。

こずえは絆創膏を受け取り、事務所にいる生田を気にするも、母を気づかう。

こずえ お母さん……。

暗転

3場

前場から3日後の月曜日。
暗転中、生田の歌声が聞こえてくる。
ミュージカル、モーツァルトの(何故愛せないの?)
を歌っている。

明転

生田は店内に作られた簡易的なステージで歌い続ける。その周りをなんとなく囲むように、服部、石原、五十嵐がいて、カウンター席には、こずえ、上沼、が座っている。

る。少し離れた所に、岩崎がいる。

服部

こずえさんゴメンなさいね、なんか無茶なお願い聞いてもらっちゃって。

こずえ

いいえ、そんな無茶だなんてことは、むしろいつ君も嬉しそうだし。

えみ

店、暇だしね。

服部

どうしてもいつ君のところに行って、歌の練習するんだって聞かなくて。

こずえ

さとちゃんは、本当にいつ君のことが大好きです昔から。

服部

そうなのよ、だからいつ君が施設を出てから半年間、ずっと元気がなくて。

こずえ

そうですか。

服部

それでどこで聞きつけたのか、こずえさんの喫茶店に居るって知ってからは、いつ君と一緒に歌の練習するんだって聞かなくて、

それで……。

えみ

何で歌の練習なんですか？

服部

ほら、うち複合施設でしょう、だから別棟にはお年寄りもいて、事ある毎に歌を歌いに行って盛り上げてくれてたのよ。

えみ

ふーん、それで。

こずえ

まあ、本人たちは盛り上げていると言うよりは、ただ歌を歌いたいだけなんだろうけど。

服部

それでも歌う方も、それを聴く方も楽しそうだから。それに少なからず、いろんな人に関わる事で理解が広がればと思うし、彼らの世界も広がるだろうし。

こずえ

そうですね。

生田が歌い終わり、一同拍手。

こずえはCDデッキを止める。

石原

いつ君、ステキ。やっぱいつ君の歌が一番よね。

五十嵐

ええ、まあ、それはそうですね。でも私的には、さとみさんが一番ですがね。

いつ君

(喉を擦りながら) 久しぶりの練習なのでピリピリします。

石原

いつ君、大丈夫？

五十嵐

彼も大人の男ですからそれくらいはー。

石原

五十嵐、飲み物。

五十嵐

はい、只今。

五十嵐はウロウロしつつ岩崎の所へ行く。

石原 五十嵐、早く。

五十嵐は目の前のコーヒーカップを手に取り石原へ渡す。

岩崎 . . .

石原 はい、いつ君。(コーヒーカップを渡す)

こずえ あ、ちよつとそれ。

生田はコーヒーを口に含むがカップに戻す。

いつ君 おえー。(カップを石原に返す)

石原 いつ君大丈夫？ (カップを五十嵐に返す)

五十嵐はカップを岩崎へ返す。

えみ どうしたの？

こずえ いつ君コーヒー飲めないのに。

服部 あらら、喫茶店の店員なのに。

こずえ ほらいつ君、こっちでうがいを。

生田はトイレへ入る。

こずえ トイレでうがいしなくてもいいのにね。

石原 いつ君、大丈夫？

こずえ 大丈夫よ。みんな喉乾いたでしょう、少し休憩したら。

こずえはカウンターに入り仕事を始める。

石原はトイレの近くで生田を待つ。

五十嵐は岩崎のところに居る。

五十嵐 エロ動画見せて下さいな。

岩崎 . . .

えみ みんな自由ですね。

服部 まあ、いつもこんな感じよ。

歌は個人個人で歌って、合唱とかは歌わないんですか？

見ての通り、みんなで一つの事に取り組むってのが、彼らにはな

かなか難しくって。だから歌いたい人が、歌いたい曲を歌うって事

にしているの。

服部

えみ

服部

えみ
こずえ
なるほど、……で、いつ君のさっきの歌って、何の歌なの。
私もちやんとしたやつを聴いたことがないんだけど、ミュージカ
ルの歌らしいわよ。

えみ
こずえ
へえ、ミュージカルが好きなんだ。
好きと言うか、いつ君が昔、お母さんと一緒に観に行った最初で
最後のミュージカルだったのよ。
最初で最後？

えみ
こずえ
そう。(飲み物を持って行く)
いつ君のお母さんって、亡くなっちゃったんですか？
いや、そうじゃないんだけど。いつ君は小さい頃から、お母さん
一人で育ててもらってて。ほらまあ、それぞれいろいろと家庭の
事情があるでしょう。

えみ
こずえ
ああ、まあ。
でも正直、障害のある子供を女手一つで育てるのって、ものすご
く大変なのよ、体力的にも金銭的にも。それに周りの理解がない
となかなかね。それである時、やっとの思いで再婚したのよ、い
っ君のお母さん。その時はものすごく喜んでいてね、私達にこう
言っていたの。「現れたんです、理解者が、私もつよしと一緒に面
倒を見てくれるっていう奇特な人が」って、ところが喜びも束の
間、その旦那、いつ君に暴力をふるうようになって……。

えみ
こずえ
ひどい、何でそんな事を。
それどころか、いつ君のお母さんにも。障害を持つ子と生活を共
にするって事は、身内でも根気がいる事なのよ、たとえ夫婦にな
ったとはいえね。相手が車椅子に乗ってたり、白杖棒を持ってた
りして身体的障害があるんだと分かれば、対峙する側も心の準備
がしやすいかもだけど、なまじっか、いつ君の障害は目には見え
ないからね。その旦那にとっていつ君は、想像以上に重荷だった
のよ。だからって許されることではないけど。
……。

えみ
こずえ
拳句の果てにその旦那、やけを起こしたのか障害者年金にも手を
付けだして、お母さんも必死にそれだけは阻止しようとしてたみ
たいなんだけど……、ノイローゼになっちゃったらしくて、も
う連絡がとれないのよ。施設の人間としてはそれ以上は介入が難
しくて、あとは行政にまかせるしか……。

えみ
こずえ
そんな事が現実にあっているの……。
(戻って来て)彼らにとって親は最大の理解者で最後の砦なのよ、
それが崩れ去った時には、彼らの歩む道は……。
歩む道は？

えみ
こずえ
人間社会で生きる術を持たない彼らは、概ね飢えを凌ぐ為に、万
引きなどの軽犯罪で刑務所かもしくは浮浪者、最悪は……。

えみ じゃあヒーローって慕われるくらい正義感の強い、いつ君は……。
服部 刑務所に入るようなことはしないでしょね、おそろく。
えみ じゃあ……。
服部 ゴミに埋もれていたところを、でしょ。
こずえ ……。
えみ あんたって人は、どこまでー。

トイレの流れる音がして、生田が出てくる。

石原 いつ君、長かったね、大丈夫？
いつ君 うんちが出ただけ。
石原 ええ、血が出たの、大丈夫？
いつ君 (植物の前に座り込み) 紹介します、せいちゃんです。
石原 せいちゃん？
いつ君 あちらの、岩崎せいとさんから頂きましたから、せいちゃんです。
石原 え、頂いたの、何を？

岩崎はコーヒーカップを持ってカウンターへ。

岩崎 あの、これ。
こずえ あ、おかわりですか？
岩崎 ええ、まあ。生田君がさっき……。
こずえ あ、そうですよねすみません、すぐ淹れなおしますので。
岩崎 すみません。ちょっとトイレに。(トイレに入る前に植物を一瞥して)
服部 あの常連さん？
こずえ はい、とつてもいい人で。
服部 唯一のね、でも何か独特よね。
えみ そうなの。
服部 はい、どことなく。それに私がここに来た時は百パー居ますし。
えみ へー、もしかして、えみさん目当てなんじゃない。
服部 やっぱりそう思いますう、くにこさんも。
えみ え、ああ、うん。
こずえ ねえこずえ、あの人って何してる人なの？
えみ え、何って？
こずえ だから仕事よ、だってしよっちゅう此処に来てるんでしょ。
えみ まあ来てるけど、仕事の事なんて私は知らないわよ。あ、でも確か、フレックス出勤だから時間にはゆとりがあるとか言ってたかな。
えみ てことは、俗に言うホワイトカラーって事かしら。

服部
えみ

まあ見た感じでは、肉体労働者って雰囲気ではないわねえ。
いつもここに来てパソコンいじってるんでしょ？ て言うことは、
IT関係の仕事かしら。もしかしてベンチャー企業の社長だった
りして。

服部

こずえ

ずいぶん飛躍するのね。
でも、えみのタイプではなさそうだよな。

えみ

まあ韓流って感じではないけど、この際見た目は二次でしょう
ここまでくれば。ハイスペックはそれらを補ってくれるのよ。

トイレの流れる音。

岩崎はトイレから出て来て、えみの視線を感じる。

岩崎

えみ

・・・あ、どうも。
こんにちは。

一同

こずえ

あ、岩崎さんコーヒーすぐお持ちしますのよ。

岩崎

あ、はい。(席に戻る)

独りで動き回っていた五十嵐も岩崎の前の席に座り、
リュックからピコピコハンマーを取り出し。

五十嵐

岩崎

あなた、私に勝てますか？

五十嵐

い、いざっ。

岩崎

いざ？

五十嵐

最初は、最初は、(ジャンケンの構えをして)んん、最初っからっ。

岩崎はかけ声につられてグーを出す。

五十嵐はパーを出す。

岩崎

あ。

五十嵐はピコピコハンマーで岩崎の頭を叩く。

岩崎

いたっ。

五十嵐

参ったか。

岩崎

あはは、はい。

五十嵐

ヘラヘラするな。(叩く)

岩崎

いた。

五十嵐

口ほどにもない奴め、それで愛するものを救えるとも思ってい

岩崎　　るのかっ。
え、いやー、まあ。
五十嵐　私がおねじれた根性を叩き直してくれるわ。(何度も叩く)
岩崎　　いたっ、いたっ、いたっ。

えみは化粧直しで手持ち鏡に夢中。
一同は五十嵐と岩崎の方に気づき。

服部　　あらら。
こずえ　(コーヒーを持って行きながら) こらこら、五十嵐さんっ。すみ
岩崎　　ません岩崎さん。
こずえ　あ、いや、いいんです、ちょっと遊んでいただけですから。
そうですか、それならいいんですけど。

五十嵐は岩崎を叩く。

こずえ　あ、ちよつと。
五十嵐　遊んでいるだけですから。

岩崎は、こずえに笑みを返し。

こずえ　(コーヒーを置き) それじゃあ、ごゆっくりどうぞ。
岩崎　　はい。いたっ。

生田と石原も加わって。

いっ君　ちよつと五十嵐君、僕たちにもやらせて下さい。
五十嵐　あの、生田君は私の事を五十嵐君と言いますが、そもそも私の方
が生田君より年上なので、常識的には君ではなくて、さんと呼ぶ
べきではないかと思いますが。
石原　　かして五十嵐。
五十嵐　　はい。(素直に譲る)

岩崎はその遣り取りをじっと見ている。

服部　　岩崎さんだっけ？　いい人みたいねえ。
こずえ　ええそうなんですよ。彼らに対して寛容で理解してくれてるみた
いだし、それにいつもお花とかを持って来てくれるんですよ、店
内にあるのは殆んど岩崎さんが。
えみ　　ハイスペックで性格よし。

服部
こずえ

あの人なら、いつ君の面倒を見てくれたりしてえ？

服部

分からないわよ。分からないけどもしそうになったらいいのになつて少し思っただけ、個人的にね……。

こずえ

ああ……。

えみ

何だか思い遣りのくにこさんが、マリア様に見えてきた。

服部

え、マリア様？ マリア様って聖母マリアのこと？

えみ

はい。

服部

やだやめてよ、私はただ（生田らを見ながら）他人事ではないから、どうすれば幸せに暮らして行けるかを考えただけの事よ。

えみ

職業柄って事ですか？

服部

と言うより、私も発達障害者だからね（笑）。

えみ

え？ あはは。

石原と生田が席に座り、ジャンケンをする。

いつ君

ジャンケン、ジャンケン（石原も楽しそうに）ジャンケンっ、パ

石原

（遅れて）グー。

生田はハンマーで石原を叩く寸前、五十嵐が石原の前に頭を出す。

生田は構わずに五十嵐を叩く。

いつ君

ジャンケンっ、パー。

石原

（遅れて）グー。

先程と同じく、生田は五十嵐を叩く。

これを何度か繰り返し返す。

えみは、おもむろに時間を確認して。

えみ

あらいけない、もうこんな時間、私行かなくちゃ。

こずえ

どこに？

えみ

どこにって、仕事に決まってるでしょう。

服部

あら、今から。

えみ

そうなんですよ、これから打ち合わせが。なのでくにこさん、今日はこれで失礼します。

服部

ええまた、お仕事いってらっしゃい。

えみ

はい、それじゃねこずえ、また来るわ。

こずえ

うん。

えみはお金をテーブルに置いて。

こずえ
えみ

ああ。
お釣りはいいわ。(出口へ向かい) じゃあ皆またね。

生田達はそれぞれえみにバイバイする。
えみは岩崎に会釈して店をでる。

服部

さてと、私もそろそろ戻らないと。

こずえ

え、くにこさんも行くんですか？

服部

行くんですかって、私もいま勤務中なんですけど、これでも

こずえ

ですよ。

服部

まあまた様子を見に来るから。

こずえ

はい、そうしてもらえると、いっ君も喜びます。

服部

・・・こずえさん。

こずえ

はい？

服部

今、しあわせ？

こずえ

え？

服部

余計なことかもしれないけど、人にはそれぞれ出来る事と出来ない

こずえ

い事があるでしょう。

服部

・・・

こずえ

どんなに良い事でも、どれだけ正しい事だとしても、分相応とい

服部

うか・・・、身の丈以上の事は人ひとりの力ではどうにもならな

こずえ

い事もあるのよ。

服部

・・・

こずえ

だからって、まあ簡単に切り捨てられない事もあるかもしれない

服部

けど、まずは自分の人生が一番だからね。自分を大事にして、一

こずえ

人で出来ない事は仲間に頼るってのもありなんじゃないかしらっ

服部

てね。

こずえ

・・・くにこさん。

服部

何もしてない私が偉そうにごめんなさいね。とにかく私は、こず

こずえ

えさんの戦友だから、何かあれば話してね。私に出ることなら

服部

力になるわよ、頼りないかもしれないけど。少なくとも一緒に考

こずえ

えることくらいは出来るわよ私でも。

服部

・・・はい、ありがとうございます、くにこさん。

こずえ

うん。二人ともそろそろ帰るわよ、ほーら自分の荷物は自分で持

服部

つ。

石原は逃げるように生田にしがみ付く。

五十嵐は岩崎にしがみ付く。

服部

ほら、言うことを聞かない人はもう此処には連れて来ませんよ、いいんですか？

いつ君

いやです。

石原

いやです。

五十嵐

いやです。

服部

じゃあ帰る支度をして下さい。

三人

はい。

石原は自分の荷物を持つ。

五十嵐は（ドウドウン、ドウドウン）と言って動き回っている。

生田も自分の荷物を取りに行く。

こずえ

いつ君は何も持たなくていいでしょう。

いつ君

何も持たなくていいです。

服部

はい、準備が出来た人から手を繋いで下さい。

生田が一番に服部の手を繋ぐ。

それに続いて石原が生田の手を繋ぐ。

こずえ

いつ君は違うでしょう、こっち。

いつ君

はい。

石原

いつ君はこっち。

いつ君

はい。

服部

あらら、女の戦い。

こずえ

もう、くにこさん、からかわないで下さい。

五十嵐

ドウドウン、ドウドウン（動き回っている）

服部

五十嵐君、電車には乗らないよ、バスで帰るんだから。

五十嵐

服部さん、服部さん、あの電車には乗らないのですか？ 私はどちらかと言うと、バスより電車の方をお勧めしますが、どうしますか？

服部

お勧めしてもバスで帰ります。

五十嵐はガツカリして手を繋ぐ。

服部

それじゃね、いつ君また。

いつ君

また。

石原

いつ君も一緒に行く。

服部 さとちゃん、いつ君は行かないのよ。
石原 いやだ。
服部 また次、来た時に会えるからいいでしょう。
こずえ さとちゃん、また来てね。
石原 うん、来るよ。(生田の手を離さない)

こずえと服部は顔を見合わせて。

こずえ それじゃいつ君、そのバス停までお見送りしてあげて。
いつ君 はい。
石原 はい。
服部 ごめんなさいね、こずえさん。
こずえ よっほど嬉しかったみたいですね、さとちゃん。
服部 ほんとに、今生の別れじゃあるまいしねえ。それじゃいつ君、バス停までお願いします。
いつ君 出発進行。
石原 出発進行。

二人仲良く手を繋いで店を出る。

服部 じゃあね、こずえさん、また。
こずえ はい、気をつけて。
五十嵐 ドウクダウン、ドウクダウン。

二人手を繋いで店を出る。

こずえ ふー、(岩崎に) あ、本当にいつも騒がしくてすみません。
岩崎 いいえ。

間

岩崎 あのー。
こずえ はい、あ、おかわりですか？
岩崎 あいえ、そうじゃなくて、考えてもらえましたか、あの、手伝いのー。

ドア鈴が鳴り、ようこが入って来る。

こずえ いらっしやいませ、あ。
ようこ (カウンターの方へ行きながら) あら、えらい荒れとうわね。

こずえ うん、ちょっとね。それよりお母さんどうしたと？
ようこ どうしたとつち、あんた、親が子供に会うのに理由があるかね。
こずえ いやそうやけど。
ようこ ちょっと水くらい出しなさいよ。
こずえ あ、うん。
ようこ (木の方を見て) あら、もうここも咲きようね。
こずえ うん、そうなんよ。
ようこ 咲き始めたら早いけねえ、散るまであつという間よ。
こずえ はいお水。
ようこ ありがとう。
こずえ それより大丈夫なん？ 四日間も東京におってから。
ようこ 大丈夫つち何がね。
こずえ だけ、お店よ。
ようこ 大丈夫よ、ただ一泊延ばしただけやないね。それに早く帰ったと
こずえ ところで、誰かがお母さんを待つとる訳やないし。
こずえ お客さんが待つとるかもしれんやん。
ようこ お客さんは、お客さんやろうもん。
こずえ ・・・。
ようこ ほんとあんたは、親の心子知らずやけ。
こずえ ・・・それで。
ようこ それでやないやろう、帰る前にこずえの顔を見てから帰ろつち
こずえ 思ったんやないね。
うん。

ようこ、水を飲み干して。

ようこ さてと、それじゃ帰ろうかね、誰もいない我が家に。
こずえ もう、帰ると？
ようこ 言ったやろ、ただ顔を見に来たつち。
こずえ うん。
ようこ よっこいしょつと、それじゃあね。
こずえ そこまで送るよ。
ようこ いい、いい、それにお店どうするんね。
こずえ ・・・。
岩崎 あの、よかったら自分、留守番しておきましようか。
こずえ え。
岩崎 ついでにそこら辺も片づけておきますので、どうぞ。
こずえ ・・・本当、いつもありがとう、ございます。ほらお母さん行くよ。
ようこ ほんと、すいません。(戸を開けて) あら、何かひと雨きそつよ。

ようこ、店を出る。
生田が入れ違いに帰ってくる。

いつ君
こずえ
いらっしやいました。
あいつ君、ちょっとお母さんをそこまで送ってくるから、テーブルとかいつも通りにしておいて、お願いね。

こずえ、店を出る。

いつ君
岩崎
お母さんは大切にしてください。お母さんは大切です。お母さんは家族ですから。家族は大事です。大事です。……僕は家族ではありません。
じゃあ一緒に片づけようか。

二人はそれぞれ片づけをするが、いつの間にか生田が岩崎をこき使う容になっている。
生田は座って水を飲みながら。

いつ君
岩崎
いつ君
うん、まあこんなもんかな。ちょっと岩崎君もこっちで一服したらどうですか。
はい……。
まあね、あの、どんな仕事もね、楽なものはありませんので、ええ。

二人はテーブルの上のピコピコハンマーに気が付き。

いつ君
岩崎
いつ君
いつ君
五十嵐君の忘れ物ですよ、これは。
そうだね。
持って行きますか？
え、今からっ。
……最初っからっ。

岩崎は咄嗟にグーを出す。
生田はパーを出し、ピコピコハンマーで岩崎を叩く。

いつ君
あいこでしょっ。(パーを出す)

岩崎はチヨキを出す。
生田がハンマーを取ろうとするが、岩崎が先にハンマーを取り、生田を叩く。

いっ君

・・・あいこでしょ。(パーを出す)

岩崎がチヨキで勝ち、生田をハンマーで叩く。
これを何度も繰り返し、次第にエスカレートしていく。
もはや生田は沈黙しているが、岩崎は止めない。

岩崎

しよっ(と言いながら生田を何度も叩き続け)大体、何で、お前
みたいな、バカが、広居さんと、毎日、一緒に、働いてん、だよ
っ!。お前みたいなの、どうしようもないバカはっ、どうせっ、
親にもっ、捨てられたんだろっ!

息を切らしながら更に。

岩崎

広居さんは、お前の、親でも、家族でも、何でもない、赤の、他
人なんだよっ! お前みたいな、バカな奴のせいで、周りの人間
も、広居さんも、迷惑してるんだよっ!
・・・もう、やめてください。

いっ君

岩崎は止めない。

岩崎

一人じゃ何もできない、頭の悪い、障害者がっ。お前みたいな奴
が、居なくなれば、すべて、丸く収まるんだよっ!

いっ君

・・・もう、いいです。
消えてしまえっ、消えてしまえっ、消えてしまえっ……………

岩崎

いつの間にか外は激しく、大粒の雨が降っていて、雷が
轟いている。

生田は胸を押さえて苦しみですが、岩崎は叩くのを止め
ない。

そして、うずくまった生田のウエスト。ポーチを漁り、盗
聴器を取り出す。

ドア鈴が鳴り、山本しんやが入ってくる。

岩崎は何事もないように店を出て行く。

山本しんやが何気なく椅子に座ろうとした時、床でうず
くまっている生田を発見する。

山本

生田君? おい、生田君大丈夫か。おい、生田君しっかりしろっ、
おい、生田君っ!

こずえが帰って来て、倒れている生田に気が付き。
暗転。

4場

前場から数時間後。

山本はテーブルに座っている。

こずえが飲み物を持って行き。

こずえ はい。(テーブルに置く)

山本 ありがとう。(一口飲んで) どう、様子は？

こずえ うん、薬が効いているみたい、今は落ち着いて眠ってる。

山本 そう、・・・よくあるのこういう事。

こずえ ううん。実は、私が路上でいつ君を発見した時も胸を押さえて苦しんでいたの、それで救急車を呼んで病院に搬送してもらって・・・、

山本 その時以来。

こずえ そう・・・。

山本 お医者さんの言うには、いつ君は心疾患もありますねって。それでいつまた発作が起こるか分からないからって、薬はいつもウエストポーチに入れて持ち歩かせてるのよ。

山本 そう、そんな事が。それだけでなくも彼らは普通よりも体力的に弱い傾向があるっていうのに。

こずえ うん、でもここに来てからは元気でずっと何事もなかったのに、何でまた急に・・・。

間

こずえ しんや君、話って？

山本 ああ、実は最近またうちの職員さんが辞めてしまって、それで今

こずえ ちよっと人手不足で。

こずえ そうなんだ。

山本 うん、それにジョアンさんも国に帰らせて下さいって言っていて。

こずえ え、ジョアンさんも。日本語も覚えて国家資格まで取って、国に残している家族のためって、一生懸命やっていたのに？

山本 ああ、結局人手不足のしわ寄せが生真面目な人のところに行ってしまっ

こずえ
山本
こずえ

ジョアンさん、人一倍まじめで責任感が強いもんね。
うん。・・・それで君に戻って来てもらえないかと思って。
え。

山本
こずえ

もちろん職員の募集はかけてる、だからってすぐにどうこうなる訳でもないし、それにいくら資格を持った人間が入って来ようがお互いが打ち解けるまで時間もかかる。大体資格なんてものは国が決めた単なる水準にすぎない、人間はそんな単純なものじゃないだろう。だから君なら施設の人間も利用者さんも顔見知りだし、それに何よりうちの職員さん達も、そして僕も君に戻って来てもらうことを願っているんだよ。

こずえ
山本

・・・
どうだろう、君が戻って来てくれたら、きっとジョアンさんも残ってくれるに違いないし、服部さんも大歓迎してくれる。施設内で働いてくれる職員さん達が元気で明るくなってくれば、利用者さんも喜ぶに違いない。今うちに必要なのは、他人が認められた資格なんかじゃなくて、うちに元氣や活氣をもたらせてくれる君なんだよ、こずえ。君にはそういう魅力があるから。
・・・しんや君は学生の頃から本当に変わらないね。
え。

こずえ
山本
こずえ
山本
こずえ

真面目で一生懸命でブレない。皆はキャンパスライフで青春を謳歌しているのに、一人アルバイトに明け暮れて・・・。
ああ。
それもすべてが自分で福祉の仕事をするためだって聞いた時は、私は感心したのと同時に、なぜそこまで出来るのか不思議にも感じたの。まあ、その誠実なところに惹かれたんだけどね。

二人顔を見合わせ笑う。

こずえ

いまだに思うもの、お爺ちゃん子ってだけでこんなに頑張れるなんて、って。

山本
こずえ

別にそれだけって訳じゃないよ。
そうなの？

山本
こずえ

うん、まあ爺ちゃんがきっかけではあるんだけど、うちの家族の事だから別に細かく言う必要はないと思って。

山本
こずえ

家族の事？
うん、僕が子供の頃の事だから、今となれば別に秘めておく様な事じゃないのかもしれないけど。

こずえ

聞いても、いい？

山本

・・・うん。僕は爺ちゃん子で子供の頃はいつも爺ちゃんにくっ付いてまわってた。爺ちゃんも僕の事をしんちゃん、しんちゃん

こずえ

山本

って可愛がってくれてて……。それで僕が中学生くらいの中から少しづつ爺ちゃん呆けだしてきて、初めは僕も家族も「爺ちゃんも歳だからしかたないね」って笑い話になってたんだけど、月日が経つにつれて症状がだんだん酷くなってきて、笑えなくなってきたんだよ皆。爺ちゃん僕の名前も忘れちゃって……。

でも仕方ないんだよ、こればかりは。歳を取れば誰だって何らかの病気はするもんだから、ただうちの爺ちゃんはそれが認知症だったってだけで……。

こずえ

山本

それで、その爺ちゃんをどうするかってのが家族で問題になってね。誰が面倒を見るのかとか、じゃあ施設に入れるのかとか、費用はどうするとか、そう言う事で揉めて、そうこうしている間に当の本人の爺ちゃんは、食べ物や喉に詰まらせてあっけなく死んじゃったんだよ。

こずえ

山本

この事で家族は何となくぎくしゃくして、でもどこかでホツとした様にも僕には見えて、結局みんなは爺ちゃんの事を考えるというより、我が身の事の方が大事なんじゃないかって子供ながらに感じてしまったんだ。爺ちゃん子だった僕にはこの現状が受け入れ難かった……。

こずえ

山本

おそらく爺ちゃんは、自分のせいでこれ以上家族が壊れるのが嫌で、わざと死んだんじゃないかと思うんだ。少なくとも僕はそう感じたんだよ。爺ちゃん頭は呆けていても……感じ取る能力、心は失ってなかったんだって……。

こずえ

山本

僕が今この仕事をしているのも、何だか爺ちゃんに導かれた気がして。きっと運命なんだよ、これが、僕の。

こずえ

山本

知らなくて当たり前だよ、誰にも言っただけだったんだから。

こずえ

山本

だからって訳じゃないんだけど、僕に協力してくれないか、こずえ。

こずえ

山本

うちに戻って来て一緒に働いてくれないか。でも、この店が……。

こずえ

山本

閉めたらいい、それにあまりうまくいっている様にも見えないし。でも。

こずえは本当に、ただこの店をやりたいだけやっているのか？

こずえ

それは……。
本当は、生田君のためにやってるんじゃないのか。行き場を無くした彼のために、この店をやっているんじゃないのか？

山本

こずえ
山本

大体、君にそこまでする責任があるのか？　……僕だって彼を突き放したくてやっている訳じゃない。でも僕一人の出来る事なんて高が知れている。いつまでも身を切ってまで彼一人を繋ぎ止めておくのはもう無理なんだよ。身寄りから見放されてしまった弱者は、今の社会ではどうにもならないんだよ、あとは行政や国に委ねるしかないんだよ。今僕に出ることは社会の仕組みに従って、自分を必要としている人に手を差し伸べる事なんだよ。

こずえ

分かるよ、分かるけど、じゃあこの店が無くなってしまったら、いつ君はどうなるの？

山本

それは彼が決めることだ。

こずえ

それが出来ないからあんな風になって。

山本

これが現実なんだよ。

こずえ

だったらまた、うちの施設に。

山本

それは、無理だ。今までも何とか、うちの施設でやり繰りして彼を看てきた。しかし障害者年金は彼の母親の再婚相手が使い込んでいるみたいで、うちにはもう何年も入金してもらえていないし、彼以外にもうちを必要としている人はまだ沢山いる。生田君一人を特別扱いし続ける訳にはいかないんだよ。

生田はいつの間にか出て来て話を聞いている。

二人は気付かぬまま話を続ける。

こずえ

……

山本

君は立派だよ、思いつきの優しさだけでは赤の他人をここまで面倒はみられないよ。でもね、優しさだけでは救えない事もあるんだ。……本当の意味で君に覚悟はあるのか？

こずえ

覚悟？

山本

そうだよ。障害を抱える病気の彼を、このまま一生面倒を看ていく覚悟だよ。生活はもちろん医療費もかかってくるだろう、赤の他人の彼のために自分の人生を犠牲にしてまでやっていけるのか？　手に負えなくなったら、はいもう知らないなんて事はあるかないんだぞ。それに、もし君のお母さんだって病気をするかもしれないじゃないか、その時はどうする？

こずえ

お母さんが……。

山本

君がまとめて二人の面倒を看るのか、そんなの無理だろう。僕らは神様じゃないんだ、すべては救えない。中途半端な施しは返っ

こずえ

て彼らを苦しめる事にもなりかねない。弱者を守るためにある社会も万能ではないんだよ、人間社会という弱肉強食の中で淘汰されていく人間がいるのも、今の現実なんだよ。

(鼻をすすり) じゃあ、私はどうすればいいの、目の前で苦しんでいる人を見て知らん顔してろって言うの。

苦しんでいるのは生田君だけじゃない。

山本
こずえ

どうすればいいの・・・、ねえ、しんや君。ねえ、私は間違っているの・・・、私はどうすればいいの、ねえ、ねえ、おしえてよしんや君・・・。

山本は席を離れて。

山本

どうするかは君自身で決めればいい。僕も今自分に出来る事をする、ただそれだけだよ。

山本は店を出る。

こずえは一人、すすり泣いている。

そこへ、生田がやって来て。

いつ君

・・・こずえさん。

こずえ

(涙を拭い) いつ君、もう大丈夫なの？

いつ君

こずえさん、痛いですか、どこが痛いですか。(ウエストポーチを

漁り)

こずえ

別にどこも痛くないわよ、それよりいつ君の方が大丈夫なの？

生田はこずえに絆創膏を貼ってあげる。

いつ君

ここですか、こっちもですか、心が痛いですか？ じゃちょっと診てあげますので脱いでください。

優しい空気の中、溶暗。

5場

次の日。

生田がいつも通りの開店準備をし終える。

いっ君

はい、キレイになりました。

生田はウエストポーチの時計をみる。そして机に座りポーチの中身を机の上に出す。この時、生田の中で皆の音がフラッシュバックし、それを受けて生田は揺れ動く。落ち着きを取り戻した生田は、おもむろに目の前の薬を両手ですくい上げトイレに入る。少ししてトイレの流れる音。またトイレの流れる音、そしてまた流れる音。相変わらずトイレの調子はよくない。

ドア鈴が鳴り、こずえが入ってくる。

こずえ

いつも混雑してるんだからお役所は……。おはよう、あれ、いっ君？

こずえはトイレの方に行きかけるが、机の上の生田の私物に気が付き。

こずえ

ああ、もうまた置きっぱなしにしてる。

生田がトイレから出てくる。

いっ君

あ、こずえさん、おはようございます。

こずえ

いっ君、おはよう。ほらこれ、ちゃんと仕舞っとかないと捨てちゃうわよ。

いっ君

……

こずえ

聞いているの、いっ君。

いっ君

(机の物を仕舞いながら) 大切ですので、こずえさん、が、困ります。

こずえ

え、私が困るんじゃないくて、捨てられて困るのはいっ君でしょう。

いっ君

僕は、馬鹿です、ので……

店の電話が鳴る。

こずえ

はいはい。(電話の方へ)

いっ君

こずえさんを困らせませんので……

こずえ

はいもしもし、「喫茶あなたの止まり木」です。もしもし、もしも

し、まただ……。

こずえは電話を切って、ふと鞆の中に入っていた手紙を手に取り、生田に視線を向ける。
ドア鈴が鳴り、えみが入って来る。

いつ君

いらっしやいませっ。

えみ

いらっしやいましたあ。

こずえ

ああ、えみ。

えみ

なに、もうやってるんでしょう、お店。

こずえ

ああ、うん。

えみ

ああ、うんって、それがお客様を向い入れる格好ですかあ。

こずえ

ああごめん、すぐ用意してくるから。(裏へ行く)

えみ

(生田に) ねえ。

いつ君

お好きな席へどうぞ。

えみ

どうも。

えみ、カウンターへ座る。

生田もカウンターに入り。

いつ君

今日は何曜日ですか。

えみ

ん、えっと……。

いつ君

今日は火曜日です。

えみ

あ、そうね。

いつ君

火曜日は何の曲ですか。

えみ

えっ？

いつ君

火曜日は火曜日の曲です。火曜日の曲は「ピアノクラシック、デ

えみ

イスク1、フェイバリットピアノ57分11秒です、はい。

えみ

はい。

生田がCDをセットする。

曲が流れる。

いつ君

シヨパン、別れの曲。

えみ

ああね。

こずえが出てくる。

こずえ

えみコーヒーでよかった？

えみ

あ、うん。ねえ、いつもこうなのいつ君は。

こずえ
えみ
こずえ

え、何が？
音楽かける時。

ああそうなの、曜日ごとにかける音楽が決まっていて、全部暗記しているの曲名も秒数も。

へえー。

それより今日はまた早いね。

早いってあんた、この店にとってはそうかもしれないけど、世間ではもうすぐお昼よ。

まあそうだけど。

こずえ
えみ

私も次の打ち合わせまでちょっと時間が空いているからさ、少しでもこの「喫茶止まり木」の売り上げに貢献してあげようと思ったのよ。

こずえ
えみ

それはどうもご愛顧頂きまして、ありがとうございます。

生田は桜の木の下で飛び跳ねている。

二人は生田を見ている。

こずえ

最近はいつもああなの。

えみ

相変わらず元気ねえ。

こずえ

・ ・ ・それがそうでもないのよ。

えみ

え？

こずえ

昨日ちよつと発作を起こして。

えみ

そうなの、何でまた。

こずえ

それが分からないの、とりあえず薬を飲んで症状は落ち着いたんだけど、またいつ発作が起こるか心配で・ ・ ・。

えみ

それでさっきボーっとしてたんだ、こずえ。

こずえ

え、それでって訳でもないんだけど、まあちよつと。

えみ

ちよつと？ ふーん、まあお店していると色々あるもんね、でしょ。

こずえ

・ ・ ・実は、ちよつと手紙が・ ・ ・。

えみ

手紙？

こずえはポケットから手紙を出し。

えみ

何またラブレター貰ったの、例のあの？

こずえ

いや、それが(数枚ポケットから出し)誰からかわからなくて・ ・ ・。

えみ

分からないって、何よそれ。

ドア鈴が鳴り岩崎が入って来る。

生田は、いらっしやいませと言いかけるが、事務所へ去る。
えみは岩崎に微笑み。

こずえ
えみ
こずえ
いらっしやいませ、・・・いっ君？
ちよっと見せて。(手紙を取る)
あ。

こずえは岩崎の所へ行く。

こずえ
岩崎
こずえ
あ、注文は？
あ、コーヒーで。
はい、ありがとうございます。
あ、それと(花を一輪差出し)これどうぞ。
岩崎さん、本当いつもありがとうございます。
いいえ。
岩崎

こずえ、花を受け取りカウンターへ戻る。

えみ
こずえ
えみ
こずえ
えみ
こずえ
えみ
こずえ
えみ
ねえ、ちよっとこれ何よ。
・・・うん。
うんじゃないでしょう、誰に貰ったのよ。
わからない。
わからないって、あんたが貰ったんでしょう、直接。
ううん、直接じゃなくて、家のポストに入ってたの。
え、でも切手貼ってないじゃない。
そうなの。
そうなのって、あんたこれ・・・。

ドア鈴が鳴り、安田が入って来る。

こずえ
安田
村岡
安田
村岡
安田
村岡
安田
村岡
いらっしやいませ。
(後ろを振り返り)あれ？(扉口で)どうしたんすか兄貴。
(オフで)兄貴って呼ぶなっつってんだろうが。
あ、はいすいません、すいません。
(オフで)居るか？
居るに決まってるんじゃないすか、ここの責任者なんすから。
(オフで)お前だれに向かって口訊いてんだコラあ。
あ、はいすいません、すいません。

安田が店の中に入って来て、続いて村岡が（長瀬智也風のピチピチの半ズボン姿）で入ってくる。皆は一度、村岡に視線を取られる。

安田 まだちよつと寒くねえっすか、・・・それ。

村岡 （窓から外の桜を眺め、爽やかに）あ、桜、咲いてるね、やす君、ほら。

安田 あ、うん、そうっすね、まあ春っすからね。

村岡 （店内の桜に目をやり）あっ、こっちも、ほらやす君。

安田 うん、そうっすね。

村岡 じゃあここに座ろうか。（桜の近くの席に座る）

安田 はい、つか、何なんすか兄貴。

村岡 こらやす君、いつも通り、りゅうちゃんって呼んでよ。

安田 え、いつも通り？

村岡 ねっ。

安田 あ、はい。

そこに、こずえが来て。

こずえ いらっしやいませ、ご注文はお決まりでしょうか？

安田 あ、どうします兄貴、（村岡の視線を感じて）あ、りゅうちゃん。

村岡 じゃあコーヒーで。

安田 あ、自分もコーヒーで。

こずえ はい、かしこまりました。

村岡 桜、いいですね。

こずえ はい、外の桜はもう満開ですけど、この木は日当たりのせいでしょうか、見ての通りまだ三分咲きくらいですけど。

村岡 でも僕は個人的に咲き始めの方が好きです。

こずえ そうですね、これはこれで私も好きです。

村岡 こういうのって、まさに「梢の春」ですよ。

こずえ え？

村岡 枝の先に花が咲いている様子ですよ。

こずえ ああ、そう言う事ですかビックリした、私の名前もこずえって言うもんですから、すみません学がなくて。

村岡 いいえ。こずえさんって言うんですか、それはステキなお名前です。

安田 ・・・。

村岡が笑い、安田も追従笑いする。

こずえも笑い、三人で笑う。

村岡は数枚の手紙に目を通す。

えみ どうなんですか？

村岡 これを、僕がこずえさんに？

えみ はい。

村岡 (笑う)

えみ 何が可笑しいんですか？

村岡 宛名も切手もない、どうやってこずえさんに届けるんですか、この手紙を。

えみ でもポストに入ってたのよね、こずえ。

こずえ うん。

村岡 それじゃあ、僕がこの手紙を毎回こずえさん宅のポストに入れた

えみ と？

えみ それを確かめるために、今直接聞いています。

村岡 はつきり言いますけど違います。自分はそんな陰湿な嫌がらせするような性分じゃないんで。

えみ そうですか・・・、それじゃあ(安田を見る)

安田 はあ、オレ？ 知らねえしそんなの、つうーか家も知らねえしそもそも・・・、ちょっと見せてもらおうよ。

安田は手紙を読み上げる。

安田 「今日もおつかれさま。」何、これだけ？ (別の手紙を読む) 「今日

日のスカート姿、とてもお似合いです。」うわっ気色悪りい。「今日は夕方から突然の雷雨・・・」ってどうでもいいし。「あいつ、もういらなくない？」え、何、あいつって誰？ 「ポンコツはスクラップへ」はっ、これ俺じゃねえからね。「社会のゴミ」「役立たず」「足手まとい」「バカ」何これ、ただの悪口じゃん。(こずえ

に) あんたそんなに人に恨まれるような事したの、見かけによらないね。

この悪口、こずえにじゃないでしょう。

え。

安田 彼女には劳いの言葉、一方の誹謗中傷は・・・。

村岡

生田が出て来て、一同の視線は生田へ。

いっ君

いらっしやいませっ。(お腹を擦りながら) ちょっとゴロついてきましたので・・・。(トイレに入る)

安田 あいつ超嫌われてんじゃん。まあ仕方ねえか、実際バカだし。直

接関わんなきゃ見てて笑えるけど、ここであいつと話してたらマジでイラつくし、鬱陶しいもんねえ、(岩崎に) あんたもそう思うっしょ。

安田は岩崎に肩を回す。

岩崎はバランスを崩してよろける。

その拍子に岩崎の荷物がこぼれ出る。

安田 おっとっと、ああ。(こぼれた荷物を拾おうとする)

岩崎 (慌てて) 大丈夫ですから……。

えみ あれ？

安田 何だよ。

えみ その封筒。

安田 あ、はい(手紙を返す)

えみ いや、そっちの。

一同、岩崎の荷物に視線をやる。

安田 あれ、同じ柄じゃんその封筒。

岩崎 ……そうですね。

安田 (封筒を拾い上げ) 何これ、流行ってんの？

岩崎 ちょっと返して下さい。

安田 中身入ってんじゃない、これもしかしてラブレター？ ちょっと見せて。

岩崎 返して下さいっ。

安田 ちょっとくらいいいじゃん。

岩崎 駄目っ。

岩崎

安田は中身を出そうとする。

岩崎 返せって言ってるだろうっ！

安田 ああ？ (岩崎を見る)

えみが安田の手からその手紙をスッと取り上げて中身を見る。

えみ 同じ。

岩崎 ……。

トイレの流れる音。

安田 同じ？
村岡 ちよっと拝見しますよ。(えみの手から手紙を抜き取り)

生田がトイレから出てくる。

安田 何て書いてんすか、兄、リゆうちゃん。

村岡 「最近は虫が寄り付いているから心配です」

安田 は？ 何の事、虫って何？

えみ ちよっと黙って。

村岡 「でも一番の虫は、いつも君の隣にいる奴だけだね」

安田 虫？ 隣？ (あたりを見回し、生田を見る)

村岡 「僕が害虫駆除してあげるからね」

えみ ・ ・ ・これ、どう言う事ですか。

村岡 俺たちは虫ですか。

安田 え、そう言う事？ じゃあ駆除するって俺らを？ (岩崎に)

岩崎 それは、(生田を一瞥して)あれの事で。

安田 あ、あいつ。害虫って生田のこと。

安田 いっ君

えみ この手紙、全部あなたが書いたんですか？

岩崎 ・ ・ ・

村岡 (立ち上がり)この手紙はあんたのだったね。(穏やかに)ほらち

やんと仕舞うときな。で、こっちの手紙はあんたのかい？

岩崎 ・ ・ ・

村岡 ん、もしもし。

岩崎 ぼ、僕のです。

安田 あ、そう。じゃこっちも返しとくね、はいどうぞ。

えみ こずえに、何であんな嫌がらせするんですか？

岩崎 嫌がらせなんてしてない。

えみ 嫌がらせじゃないですか、こんな酷い手紙を書いて。

岩崎 自分は、広居さんのためにやっているんだ。

えみ 何が？ これのどこが、こずえのためって言うの？

岩崎 彼女の事を想って、彼女を励ますためにやっているんだっ。

えみ はあ？ 励ます？

岩崎 そうさ、僕は彼女が心配で、だから少しでも元気を出してもらおうと思って、プレゼントだってしているし、この店にだっていつも来ているし、何よりも彼女もそれを喜んでるんだから何も問題ないじゃないか？

えみ 喜んでるって。ここにきてプレゼントするのは勝手だけど、そんな手紙を貰って喜んでる訳ないでしょう。

岩崎 大体、この手紙のどこがいけないって言うんだよ。
村岡 確かにこの手紙の内容は、彼女への労いの言葉ばかり、悪口は彼女にじゃない。

岩崎 そうさっ。
しかし問題はそこじゃない。その手紙はすべて住所もなければ切手も貼っていない。要するに直接自宅まで行き自ら郵便受けに入れたという事。

岩崎 ・・・。
安田 そうなんすか？
えみ あんた何で家知ってんの？

岩崎 それは・・・。
えみ 後を、つけた？
安田 マジで、気色悪いいな、あんた。

こずえ あの、一つ聞いてもいいですか？ 電話かけましたか？
えみ 電話？
こずえ 最近、無言電話が多くて、店にも、私の携帯にも。

えみ 携帯にも？ 番号教えたの？
こずえ いや、教えてないけど・・・。
岩崎 ・・・心配だったから。

えみ はあ、店はともかく、何で番号知ってるのよ。
安田 そんなの、そこん家のゴミでも漁っとけば、個人情報の一つや二つはすぐに手に入るぜ、今どき。

えみ そうなの。
こずえ ゴミはだしたらダメ、ゴミは出してもいい。

一同、軽蔑の眼差しで岩崎を見る。

岩崎 な、何だよ、何だよその目は。お前らのその目はイボか、節穴かっ。そんな目してるから肝心なところを見過ごすんだよ。事の発端はあいつだろう、(生田を指し)あのバカがいるからいけないんだよ、あの役立たずのせいで広居さんが苦勞するんじゃないか？
えみ 彼は関係ないでしょう。

えみ 関係あるんだよっ！ 何で彼女が一人で、あのバカの面倒見なきゃいけないんだよ。この店は障害者施設なのか、違うだろう！ 他人の善意にぶら下がって自分では何もしくせに。だから僕は彼女の事を想って、彼女の負担を無くしてやろうと思ってるのに、どいつもこいつも自分の都合で口を開きやがって。(えみに)えっ、大学時代からの友達が、あの役立たずのせいで困っているって言うのに、あんたは面白半分に、ただここで時間を持て余して。(村岡達に)あんたらはあんたらで、弱者から金を吸い上げて、酷い

安田
えみ

のはどっちなんだよ、この偽善者どもがっ！ 周りがいつまで経っても知らん顔して、純粋な広居さんばかりに負担がのしかかっているから、だから僕が何とかしてあげないといけない、僕しか広居さんを助けてあげられないんだ。だからまず、ろくに意思の疎通も出来なくて、社会の役にも立たないあいつを、不幸を作り出す事しか出来ないあいつを駆除してやるって言うてるんだよ。はっはっおもしろええ、じゃあ早くやれよ。

安田

悪い事してないじゃない、淀んでるのは、障害をつくっているのはあんた達でしょうが。

えみ
岩崎

じゃあお前えがあいつの世話してやれよ、一生。は？ 何でそうなるのよ。ほらね、口では立派なことを言うんだよ皆、弱い者には手を差し伸べましょうとか、理解しましょうとか。でも実際に我が身に振りかかってくれば知らん顔、他人なんてどうでもいいんだろっ、この偽善者がっ！

えみ
岩崎

だから言うてるだろうさつきから、あいつのせいで皆が迷惑してるんだよ、みんな困ってるんだよ、あいつは不幸を撒き散らす事しか出来ないんだよ。お前達みんな卑怯者だから、助けてあげなきゃとか言いつつ、何もしないだろ？ だから僕が自ら汚れ仕事をしてやるって言うてるんだよ。

村岡はゆっくりと歩き出し。

村岡

殺虫剤がいるなあ、おいやす。

安田

あ、はい？

村岡

ちよっと殺虫剤持って来い。

安田

殺虫剤すか。

村岡

おう、でっかい害虫がいるから駆除しないと(岩崎の肩を組んで)

岩崎

なあ。

えみ

あんだ達、頭おかしいじゃない。

安田

(こずえに) ねえ、殺虫剤ある？

こずえ

．．．
．．．
やす、そこちよっと行った処に交番あったろう、そこでお巡りさんに、頭のいかれた変態がいるから連れてって下さいって言うて来い。

安田

変態？

村岡

(岩崎の手を締め上げて) 此処にな。

岩崎

あ痛ったた。

安田

了解つす。(店を出る)

岩崎

ちよっと何するんだよ、放せつ。

村岡

害虫を駆除するんだよ。

岩崎

害虫はあいつだらう。

村岡

金魚の糞みたいに人の後をつけまわしたり、他人のゴミを漁ったり、無言電話をかけたたり、陰湿な手紙を何通も送りつけたりするストーリー野郎をまず先に駆除しないとなあ。

岩崎

何言ってるんだ、それはすべて広居さんのために……。

えみ

あんたまだそんな事言ってるの。こずえのためじゃなくて、自分の欲望のためでしょうがっ。

岩崎

うるさい、偽善者は黙ってろっ、痛ててて。

村岡

大人しくしないと腕の骨おるぞ。

岩崎

・ ・ ・ 広居さん、あなたも言ってたじゃないか僕に、いつもありがとうございますって、岩崎さんは本当に優しい方ですわねって。

みんなが岩崎さんみたいだったらって、言ってたじゃないですか？

こずえ

それは……。

岩崎

僕はただ、あなたの笑顔が見たかっただけなんです、あなたの喜ぶ顔を見たかったんです。それなのに……、そいつのせいで、まるで生田つよしに生気を吸い取られていくように、疲れた顔になっていく広居さんを、僕は見たくなかったんです。広居さんのために、僕は広居さんの幸せの事を想って……。だから広居さんにとって障害にしかない生田つよしは、もう消えてしまえばいいんだよ……。

生田は床で独り、うずくまっている。

こずえ

それは違います。いつ君は障害なんかじゃありません。もしそこに何かの障害があるのだとしたら、それは受け止める側にも問題があるんだと思います。みんな生きるために生まれて、みんな幸せになるために生まれて来たんですからっ。

岩崎

・ ・ ・

えみ

(生田に気づき) いつ君？

ドア鈴が鳴り、安田が入って来る。

続いて警官も入って来る。

安田

殺虫剤連れてきましたあ。

警官

え？ (皆に向き直り) どうも、またですか？

安田

警官

安田

警官

安田

警官

また？

あれ、いないじゃないですか？

何が。

この地主の、おじいさん。

は？

ここで揉め事って言ってたから。なんだ地主のおじいさんじゃないんだ、私はてっきりここのおじいさんが「この桜はワシの私的財産じゃから、誰が何と言おうと勝手に切ることはゆるさんっ」とか何とか言って怒鳴り散らしてるのかと思ったもんで。この桜もそうですけどね、裏にも何本かあるでしょう、それが一部、生活道路の妨げになってね、しょっちゅう揉めるんですわ、それでてっきり今回もまたかと・・・。

俺、爺なんて一言もいってねえし。

あ、そうだった、どうしました？

お巡りさん、変態が（指を指して）あの人、ストーカーです。

（村岡と岩崎を見て）ストーカー？ それは怖かったでしょう。はい。

世間では事件になるまで警察は動かないと思ってるでしょうが本官は違いますから、我が身の進退より本物の正義、そして市民の安心と平和。安心してくださいお嬢さん。じゃあちよっと話を聞かせてもらいますので、行こうか。（村岡を掴んで）

（振り払って）俺じゃねえよ、ふざけんなっ。

ふざけているのはあなたの方でしょうが、さあ行こうか。（村岡を掴む）

（振り払って）だから何で俺なんだよっ。

誰が見てもこの中で変態はあなたでしょう・・・、違いますか？

違うっ、お前ら黙ってないで何とか言えよっ。

分かった分かった、あなたは変態じゃない、うん。

うん、って何だよっ。

ただ少したけ話を聞かせてもらってもいいですかね。（岩崎にも）参考人として、あなたも一緒に願いますか？

え、いや。

当たり前だあ。（力づくで岩崎も連れて行く）おいやす、証拠品。

あ、はい、りゅうちゃん。（岩崎の荷物を持って）

テメえ、誰に口訊いてんだよっ。

え、だって兄貴がそう呼べって。

あーんっ？

はい、すいません。

村岡、岩崎、安田、店を出る。

警官

それでは後の事はお任せ下さい。

警官も店を出る。

えみ
こずえ

(ため息) とりあえずこれでよかったわよね、こずえ。
いつ君? いつ君、大丈夫っ?

胸を押さえて苦しむ生田。

えみ
こずえ
えみ

どうしたの、いつ君。
分からない、気が付いたら苦しんで……。
え、何で、発作?

更に苦しむ生田。

こずえ
えみ
こずえ

いつ君大丈夫? 薬、薬(生田のポーチを漁る)あれ、ないっ、
何で……、何でないのよっ。
ちよっとこずえ、何してるのよ。
無いのよ、薬がっ。いつもこのポーチの中に入れてるのにな、薬
が。

えみ

ええっ、何でそんな大事な薬なのに、ちゃんと数、確認しとかな
いのよっ。

こずえ

(生田からポーチをはずして中身を全部出す)昨日はまだあった
のに……。

えみ

じゃあ何でないのよっ。
そんなの私にも分からないわよっ。

えみ
こずえ

裏はっ? 裏に置いてあるんじゃないのっ。
裏っ?

えみ
こずえ

ちよっと見てくる。(事務所の方へ行く)
私も。(行きかける)

こずえ
いつ君

こずえさん……。
いつ君。

こずえ
いつ君

こずえさん、聞いて、ください。
何、いつ君、薬は、お薬は何処にあるの?

いつ君

お薬は、お薬は壊れたところを、治します。なので、のませて、
のませて、あげました。

こずえ
いつ君

え? 飲ませてあげた?
これで、おトイレは、治ります。

こずえ

え、トイレ?

いつ君 おトイレがないと、みんな困ります。僕がいると、みんな困りま

こずえ 何言ってるのか分からない。

いつ君 僕は、こずえさんの困った顔を見るのはウンザリですので、僕が
いると、こずえさんは困りますので、お薬は、みんな、おトイレ
に、飲んでもらいました。

えみ (入って来て) もお、どこにあるか分からない。

こずえ え、まさか、トイレに流したの？

えみ え、・・・(トイレに行く)

いつ君 僕は、僕は、頭が悪いので、家族でもないですので、僕とこ
ずえさんは赤の他人ですので。僕はこずえさんを、困らせてしま
いますので、困らせて・・・。

こずえ 何バカなこと言ってるの、人を、人を助けるのに理由なんていら
ないでしょう！

えみ (オフで) あった、あったこれ、これ、いつ君の薬じゃないの、
便器の脇に落ちてたっ。(出てくる)

生田はこずえの腕の中でぐったりとしている。

えみ こずえ。

こずえは生田を抱えたまま、肩を震わせている。

えみ え。
こずえ いつ君、いつ君、もう、バカなんだから・・・。

こずえは鼻をすすり、えみはその二人を前に呆然と立ち
尽くす中・・・、暗点。

エピローグ

それから十日ほど経ち、店内の桜も散り始めている。
店は閉店しており、警官が一人考え深げに桜の木を眺め
ている。
そこへ安田が段ボール箱を抱えて出てくる。

安田

何で俺が手伝わねえといけねえんだよ大体。

警官

安田

警官

あ、先日はどうも。
殺虫剤。
いやあ早いもんですねえ、この前咲いたと思ったらもう散り始めてる……。

安田

……でも来年になったらまた咲くっしょ。

警官

そうですね、来年も再来年もその次の年もその次も。

安田

当たりめえじゃん。

警官

ははそうですね、当たり前なんですよね、この桜の木にとっては……。一年に一回、花を咲かせるために生きている。ただそれも状況によつては障害になる場合がある。他人の目先の都合で、これを排除しようとする、そんな人達と戦っているんじゃないかね、こここの家主のお爺さん。

間

警官

いやね実は私、最近上司に叱られましたね……。現場で上司の指示を仰いでたんですがね、目の前で事が進んでいるのを見ると返答を待っているのがもどかしくてね、それで言っちゃったんですよ。事件は会議室で起きてるんじゃない、現場で起きてるんだって、心の中で……。それで自分の判断で動いたんですよ、そしたら（笑）。

安田

いや、その事案は問題なく解決しましたからご安心を。

警官

別に心配とかしてねえし。

安田

私ね、自分の仕事に誇りと言うか、哲学を持っているんですよ。

警官

聞いてねえし。

（自分の制服を見せつけて）ほら、私、正義をまもっているんですよ、でもねこれは単なる見せかけです。本当の正義は（自分の胸に手を当て）此処にあるんです。だからたとえ上司に怒られようと私の正義は屈しません、安心してください。

安田

だから別に心配してねえから。

警官

私のこの目は節穴ではありませんから、真実のみを見定めますので。

安田

いやこの前、兄貴と変態野郎を間違えてたじゃん。

警官

あれは誰がどう見たってあっちが変態でしょう、あんな恰好してるんだから。

安田

つーか何しに来たの殺虫剤。

警官

え、いや先日の件で報告を兼ねて、ここ閉店するって言うからちよっと顔出しに来ただけですよ、まあもう帰るところですがね。

安田

さよなら。

警官

(出口へ)・・・あと殺虫剤じゃくて、せめてお巡りさんとかで、ね。

警官出て行く。

外から山本が入って来る。

山本

あ、安田さん、ありがとうございます。

安田

どうも、礼なら兄貴に言っといてよ。兄貴が行けって言うから仕方なくやってるだけだし俺は。

山本

はい。

安田

あの変態根暗野郎のこと、全部聞いたでしょう。

山本

ええ、まあ大体は。

安田

ほんと人は、何考えてんのか分かったもんじゃねえよなあ。結局あいつ無職で、いい歳して親のすねかじりながら、こそこそ他人の生活覗いてんだぜえ。

山本

うん。

安田

盗聴器なんか仕掛けたりしてよ、気色わりい。あの変態、善人のふりしてあれだろう？ 誰が障害者だ、って話だよなあ。

山本

そうですね・・・。

安田

へっ、別に良いんだよ俺は、誰が障害者だろうが健常者だろうが、まあ世間から見れば、俺みたいのが障害なんだろうけどなあ、はは。

山本

あ、はは。

安田

ただ兄貴は、こんなバカな俺でも面倒見てくれるんだよ。

山本

村岡さんでしたっけ。

安田

親すら俺を捨てるっていうのによ。

山本

え、両親に？

安田

親も、世間にも。

山本

・・・

みんな俺をシカトしやがる、無かった事にしやがんだよ、無関心決め込んでやがんだよ。その時に俺思ったんだ、「俺、何のために生まれて来たんだろう」って、んで俺は死んだ・・・。

山本

・・・

安田

生きてる意味ねえなって。で自棄になって滅茶苦茶してたところに兄貴と逢って・・・、こんな俺の面倒見てくれたんだよ、俺の存在を認めてくれたんだよ、あの人が。

山本

・・・

安田

それから俺は、兄貴に一生ついて行くって決めたんだ。

山本

そうですか。

安田

・・・あーあ、無駄口叩いちまった。ところで、あんたあの人

山本 彼氏なんだってね。
え、まあ。
山本 結婚すんの、あの人と、（荷物を持って）よいっしょっと、余計なお世話か。
山本 ……あ、（ドアを開けてあげる）どうぞ。

安田、出て行く。
服部とえみとこずえが事務所の方から現れて。

服部 ほほほ片づいたわね。
こずえ はい。

えみ あとは、ゴミでいいんでしょう。

こずえ うん、ありがとう助かった。今お茶入れるから少し休んでいって。

服部 いいわよそんなの、片づける物が増えるじゃない。

えみ あ、しんや先輩、もうこっちは大体片づきましたので。

山本 あそう、お疲れ様。

服部 こずえさん、お母さんは？

こずえ あれ、どこに行ったのかな、自分から手伝うって言うておいて。

山本 お母さんならトラックに乗ってるよ。

こずえ ええ、もうお母さんったら、結局何しに来たんだか。

えみ 決まってんじゃない、（ボソリと）先輩に会いに来たんでしょうよ。

山本 僕が頼んだんだよ、駐禁とられないように乗っておいてください
つて。

服部 それなら、さとちゃん達が……。

石原と五十嵐が入って来る。

石原 いっ君、いっ君はおりませんかあゝ。

五十嵐 ー、んー。

服部 あらら、さとちゃん車で待ってるって約束したでしょう、だから
連れて来てあげたのに、五十嵐君も。まあ、無理かあ、はっはっ
は。

石原は事務所の方へ、五十嵐は店内を歩き回っている。

石原 いっ君、お歌の練習しますよ。（事務所へ入ってすぐ出てくる）い
ません。おトイレですかあー、いっ君。

えみ さとちゃん達って知らないんですか、いっ君のこと。

服部 うん、そうなの。

こずえ ……。

えみ
服部
石原
そっかあ。
(密際に行き) ほらさとちゃん、こっち来てごらん。
なに、いつ君いたの？

石原と五十嵐は窓から外を眺める。

えみ
こずえ
山本
えみ
ねえ、今もしかして、あいつとこずえのお母さん二人きりなんじやない？ 大丈夫かな、あいつ無神経だから。
大丈夫でしょう。
それじゃあ、自分がちよつと様子を見てくるよ。
ああ、いいですいいです、しんや先輩、私が行きますから。先輩はこの後も運転があるから、こっちで少し休んでいて下さい。

えみ、店を出て行く。

山本はカウンターの方へ近づく。

こずえは盆に人数分のコップをのせて、服部らに差し出す。
そして山本にもコップを差し出す。

山本
こずえ
山本
こずえ
山本
こずえ
石原
服部
五十嵐
石原
服部
ええ、見てるわね。
結局、私、どれもこれも中途半端。人に頼ってばかりで何にも出
来ない、この店もだし・・・、いつ君のことだって・・・。
それは僕だって同じさ、僕に力があれば生田君を救えたかもしれない、こんな仕事をしていながら人ひとりも救えないんだから情
けないよ。
しんや君・・・。
僕も爺ちゃんの事があって、正義感にかられてここまでやって来たけど、経済を優先する社会において、善意は時に非力で滑稽ですらある。ふとした瞬間その事を客観的に捉えた自分に襲って

こずえ

る、何とも言えない虚しさに心が引き裂かれそうにもなる。しんや君は本当に偉いよ、立派です。私の目に狂いはなかった。だから私も自分を信じて、今私にとって何をやるべきか、何が大事かをしっかり見つめ直して、しんや君に嫌われないようにじつくりと考えてくる。だから、まず自分に出来る事をやる。

山本

うん、(立ち上がり) そりゃそつだ。そろそろ車に戻るよ、お母さんにも悪いし。服部さんっ、自分トラックに戻っておきますので。

(外へ出る)

服部

はい、わかりました。

石原

あたしも、お外に行く。

服部

お外？

こずえ

いいですよ、くにこさん。後は私だけでも十分ですので。

服部

そう、それじゃお散歩しようか。

石原

お散歩する。

五十嵐

オッサンオッサン、オッサンオッサン。

服部と石原と五十嵐も外へ出る。

こずえは三人を桜の近くで見送り。

こずえ

さてと。

えみと安田が入って来る。

えみ

こずえ、もう持って行く物ないの？

安田

何でまた、俺もついて来なきゃなんねんだよ。

えみ

あの観葉植物は。

こずえ

あれは、ここに置いて行く。

えみ

そう、それじゃ一応、もう一回裏見てくるね。ほらっ行くよ。

安田

ああ、だから何で俺が行かなきゃなんねんだよ。

えみ

頼まれたんでしょ、兄貴に。

安田

ったく。

えみと安田は事務所へ。

こずえ

(観葉植物を覗き込み) もう、ないよね。おーい、おーい、あは。時々会話してたよね、いつ君。(しゃがみ込み) こんにちは、広居こずえです。

えみ

(生田のマネをしながら) こずえさん、こずえさん。

こずえ

え？

えみ

こずえさん、こずえさん。

こずえ
えみ

もう、ビックリさせないでよお。

これはどうしますか、いつ君のじゃないですか？（プルトップの
入った瓶と銀の缶ケースを手に）

こずえ
安田

（後ろから）そんなゴミ、缶と一緒に捨てちまえよ、持っても
仕方ねえだろう。

えみ
こずえ

確かに。でもこれってお金とかに替えられたり出来ないの？
どうだろう。

えみ

まあたいした価値はないかこんなの、（缶ケースを振って）でも結
構あるわよ。

安田
えみ

あいつも、せこい趣味してるよな、そんなもん。
（何気なく缶の中身を見て）あれ、何か入ってる。

安田
えみ

だからプルトップだろ。
いや、これ。（中から手紙を出す）手紙？
え、ちよっと見せて。

こずえ
えみ

あ、はい。（手紙をこずえに渡す）

こずえ
えみ

（手紙を開いて）いつ君、字書くの苦手なのに……。
（手紙を覗き込み）うわ、古代文字みたい。

安田
こずえ

ねえ、何て書いてんの？
（ゆっくりと手紙を読む）「ぼくわ、あたまがわるいです。ぼくわ、
みんなにめいわくをします。ごめんなさい。」

安田
えみ

迷惑をするってなんだよ。
うるさい、ちよっと黙ってよ。

安田
こずえ

ああ。
「ぼくわ、こずえさんにわかんしゃしています。こずえさんわや
さしいのでぼくわ、こずえさんといっしょにいるとしゃあわせです。
とてもしあわせです。これからもずっとこずえさんといっしょに
いたいです。でもぼくわ、こずえさんとわかぞくでありません
のでだめかもしれません。」

えみ
こずえ

いっ君って……、こずえの事を……。

えみ

……「もしぼくがぼかじゃなかったら……。もしぼくがもうす
こしちゃんとしてたら……。もしぼくがふつうのひとだったら、
かぞくになっくれますか。」

こずえ

（涙を堪えきれず）「かぞくになっくれますか……。ぼくわこ
ずえさんのことがすきです。これからもいっしょにいてほしいで
す。」

えみ

これって……。

こずえは涙で手紙が読めない。

えみは缶を置き、手紙を受け取る。

えみ

(続きを読む)「ぼくわこずえさんのいないせいかつわいやです。めいわくおかけないようにしますので、ぼくのかぞくになつてください。」……ねえ、これって、いつ君からの……。

安田

違う、……プロポーズ。

こずえ

プロポーズ？

えみ

(読む)「これわかぞくのしるしです。」

安田

えっ？

こずえ

「ちぎれてもいいようによびもあります。」

えみ

こずえは缶を開けて、中からプルトップに埋もれたネックレスを取り出す。

こずえ

(泣きながら)いつ君、いつ君。

安田

何それ？

えみ

プルトップの……、ネックレス。

こずえ

私、汚いって言っちゃった……、私、ゴミって言っちゃった……、いつ君、ごめん、いつ君、ごめんなさい……、いつ君……、ありがとう……。

店内に桜が舞い散る中

えみは、泣いているこずえを慰めている。

そして缶の中からもう一つの「プルトップのネックレス」を出してこずえの首にかけ、二人に笑顔がこぼれる

安田も缶の中を漁るが、バラバラのプルトップしか残っていない。

こずえ

(ネックレスを見つめながら、ぼそりと)彼は生きている……。

明りはゆっくりと落ちていき

声

「忘れられない限りなくなりません、あなたの記憶の中で……。」

桜の木にスポットがあたり、その下で生田が跳びはねている中……暗転。

幕